

昭和廿二年七月一日發行第十一期第六號可（每月一回一日發行）

創刊大正十三年・通卷三百四十九號

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.349

麻生路郎女主人



1110

川
柳
の
雅
証

號月六



次 目 号 月 六

窓	口談	義	麻生路郎	(三)
川柳家の二十四時	堀口 塊人・三条東洋樹	清水白柳子・川上三太郎	丸尾 潮花	長野 文庫
小西富士子さん	ニコロンの歌	新川柳鑑賞	幸福を幸福に	変人 会
源頼義と義家	二つのこと	経隆あれこれ話	受売りばなし	鏡野の集い
川柳まつり	青ペン赤ペン	飛燕往来	不朽洞会の告知板	不朽洞句帖
川柳	同舟近詠	近作柳櫛	一路集「帯」	各地柳壇
金泥集	川柳第二教室	不朽洞会から	柳界展望	公私雑記
戸田古方	麻生路郎	麻生路郎	麻生路郎	麻生路郎

全五十巻
新書養教学生
日本図書館協会選定図書

麻生路郎著

川柳とは何か

— 川柳の作り方
と味い方 —

二五〇円 送三三円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五十余年間の実作者としての尊い経験を生かして最も平易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

取次 川柳雑誌社

至 文 堂

東京都新宿区払方町

山 雨 楼 忌 句 會

何負けてたまるか目にも見えぬ菌 (山雨楼)
オ、山雨楼と呼べば一ト筋のけむり (路郎)
手向けの一句をみんなで捧げましよう

日 時 六月七日(木) 午後六時
場 所 光明寺

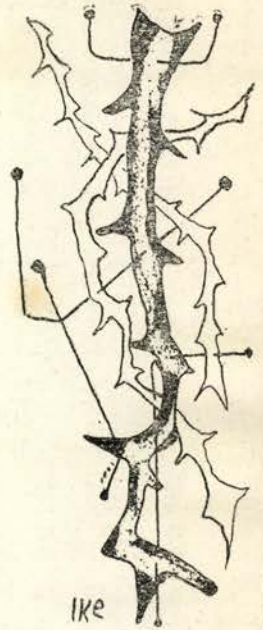
兼 題 大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

「追憶」(三句) 麻生路郎選	「豆スタ」(三句) 中島生々庵選	「テレビ」(三句) 西尾 菜選	「矢印」(三句) 真鍋一瓢選
三題(当日発表)			
席 題 柳話	柳 評	句 賞	呈 費
麻生路郎	北川春巢	★各題天位	★路郎選天位に不朽洞賞
五拾円	幹事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ・雄声・	堰子・白水・東洋男・愛論・一三夫	

川柳雑誌社句會部

窓 談 義

名人團平のこと



IKE

五月の杏林川柳会は句会後、文楽座の鑑賞会を催した。夜の部の第一の出し物は六十年忌に因んで大西利夫氏脚色の「名人豊沢団平」であった。

これは芸一筋に生き抜いた団平を取扱ったものであるが、川柳一ト筋に生き抜こうとしている自分にとって多くの共感するものがあり、舞台上食い入るように眺めていた私の両眼からはとれどもなく涙が流れた。語り手としての越路、三味線としての団平は当時の至宝には違いなかつたが、芸道の上で二人は相容れなかつたので団平は越路と袂を別ち、

門下の大隅を携えて旅興行に出た。しかしながら折角の壮挙も事志と違つて不入りに次ぐに不入り、一座は生活に窮した。妻のおちかや大隅が、再び大阪に戻つて越路と手を握ることを頼んだが、仕打に買収されたのであると怒つて応じようとしなないので、おちかは越路から折れて来た依頼の手紙を見せたところから、団平は越路の友情に感謝したが、芸の上では妥協を容れない彼はおちかや大隅の願いをしりぞけた。彼は三味線を売つても、この場の苦境をしのいで、大阪に帰り、自分としての芸を生かして

行くことを云い放つた。大阪での興行には、おちかの作の壺坂靈驗記を出す予定で大隅に稽古をつけていたが、おちかのものした壺坂のさわりのところで、お里の愛情に、もの足りなさを感じたので、それも中止することにした。おちかは原稿をふところにして京の奥家に帰えた。その後の団平が苦難の中に仆れたと聞いて、おちかがその枕辺へかけつけた。ここで書きかえられたさわりを大隅に語らせ、それでよいと満足してイキを引きとるのが、この名人豊沢団平の荒筋であり、その書きかえられた

たき、わがが今日に残っている「三つ違いの兄さん」と云うて暮らしているうちに」の名文句である。

私は小学校の時分から、おぼアさんに連れられてよく御霊文楽座の木戸をくぐつたものである。あの頃の絵看板に沢市が手を合して谷底に飛び込んでいて観音さんが後方にあらわれているのを今も眼に焼きつけられている。私が今でも、壺坂のさわりが好きなのは偶然ではないような気がする。これが明治時代即ち私が聞いていた明治時代の新作物だとは夢にも思つていながら、後年それを知つて驚いたのである。それほどよくこなれていて新作物の匂いが少しもしなかつた。

妻のおちかの創作力にも感歎を惜しまないが名人団平がコレを一つの浄瑠璃芸術に育てあげたことは流石に名人の名にはじないと思ふ。

さてと私は云う。この名作へ辿りつくまでの団平の芸道の悩みがどんなものであつたかは想像に絶するものがあつたに違いない。彼が、生活の道を絶たれようとしてもガンとして妥協しない不屈な精神である。おちかに対しても門弟に対しても、ライバルの友情に対しても、血涙を呑みこんでの決意、これを私達は偉としなければならぬ。たぢまの、直前の問題に、僅かでも妥協していたら、食う

のには困らないであらうし、ある程度の成功はかち得たであらうが、遂にこの不朽の名作は完成しなかつたであらう。芸術とはそんなものである。彼のガンとして容れなかつた心境を私は嬉涙で迎え容れたのであつた。これは川柳一ト筋に生きようとして闘つて来た私に多くの苦い経験が実証してくれている。あゝ偉なるかな団平。(路)

不朽洞句帖

麻生路郎

三朝温泉にて

混浴に男の方もうしろ向き
失礼々々と混浴へためらわず
三朝ぶしかえしやせぬとは誰のこと
橋ぐらいまでは見送る温泉なり
鳥取の砂丘
朝鮮はどこやと談す砂丘なり
砂丘では学者の如きバスガール
砂丘遙けしサンドスキーのアブレぶり

川柳家の二十四時



市宮西 堀口塊人

- 一時★ 大軒たよりにされてる とは知らず
- 二時★ 夜もすがら寝返りをし て男の子
- 三時★ 熟睡を誇り出世もせぬ 男
- 四時★ 甲斐性なし寝ている刻 が極楽で
- 五時★ うがいして座禅をすれ ば明けかかり
- 六時★ イヤホーン鉄筋アパー ト四畳半
- 七時★ 味噌汁のうまさ今日 も生きんとす
- 八時★ 車窓から首屋あたりの 海と山
- 九時★ タイプ打つ音から朝の 事務となり
- 十時★ サインして判コを押し てお茶を呑み

- 十一時★ 報告にまたもめ事がつ づくなり
- 十二時★ 支店長会食も亦事務の うち
- 十三時★ 役人は待たしておいて 悪びれず
- 十四時★ わかつてる事に会談の はかどらず
- 十五時★ 小切手のこれは私の金 で無し
- 十六時★ 税関へ叱られに行く事 務もあり
- 十七時★ たった百株でこっそり 値をしらべ
- 十八時★ そば一つ喰べて映画の 客となり
- 十九時★ 舌ばかり発達をする社 用族
- 二十時★ 呑むまねも上手になっ てよくつとめ
- 廿一時★ 蝶々雄二アチャコ千栄 子に世は愉し
- 廿二時★ 推理小説に心を盗まれ る
- 廿三時★ まとまったものも読ま ずに夜を更かし
- 廿四時★ 十二時とチャルメラの 音に夢うつつ



市戸神 樹洋東條三

- 一時★ 熟睡の最中でしよう
- 二時★ 夢を見ない夜はないか ら、この時刻から夢の お国入りでしょう
- 三時★
- 四時★
- 五時★ 新聞屋や牛乳屋が通り 始めるので、飼犬「ア キ」が吠え出します
- 六時★ 睡い時にはこの犬の声
- 七時★ 最後私と末っ子がや つと起床。神仏のお花 の水をかえて礼拝
- 八時★ 朝日新聞を見ながら食 事、出勤
- 九時★ 朝の電車の中ではつと めて物を読まぬ事にし て瞑想、この時に句が 出来る事が多い
- 十時★ 事務所で見ら新聞は日 経、読売等
- 十一時★
- 十二時★ 風食は牛乳とパン

(1)

蘭大家の真夜中の夢から、晩酌の隣子の飲め食卓の皿の中まで覗かされて居いた。蘭先生は生活断片史として、後世これが貴重な文獻となるかも知れない。

— 堀集局

十三時★ 川柳の原稿は事務所へ書く事が多い

二十時★ 庭の草花を一寸いじる 洋酒の壺を沢山並べてカクテルを二三杯。ほんのりよい機嫌になる

八時★ 家でする仕事の段取をつけて現場へ出かける

一時★ 白河夜船

十四時★ 仕事(午前と同じ)

十四時★ 夕刊に一応目を通して

九時★ 明日の「時の川柳」の選をして気が向けば温泉へ行く

三時★ 読書

七時★ 洗顔(歯ミガキ「パール」チュウプ、石鹸不用、ポーラ乳液)

入浴 晩酌(三合)サカナは豆腐とトロロをミックスしたやつ

十六時★ 大阪駅から省線で一撃

十一時★ 将棋を二三番指す伴が居る

四時★ 家に居ればキッチリ甘いものを買ってきてくれる

六時★ 朝飯(米飯)小生は一日一食です

二十時★ 見、聞いていて午前一時頃帰宅。一カ月十五日はそれで暮らしています

十八時★ 空腹をかかえて我が家へ入る。明るい時には

十二時★ 十一時過ぎ就寝

二時★ 仕事、選句と原稿書き(ひる飯食わず)

九時★ 外出とは一放送、講演、座談会、映画試写等の仕事での場合です

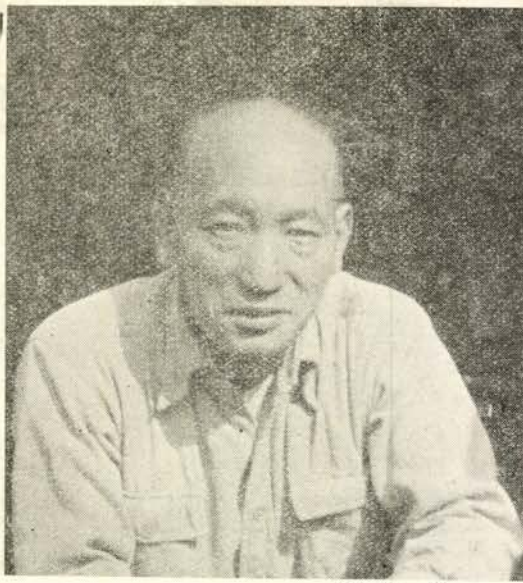
十九時★ 廿三時★ 廿四時★

十三時★ 十六時★ 十七時★ 十八時★

一時★ 二時★ 三時★ 四時★

五時★ 六時★ 七時★ 八時★

九時★ 十時★ 十一時★ 十二時★



大 阪 市

清水白柳子

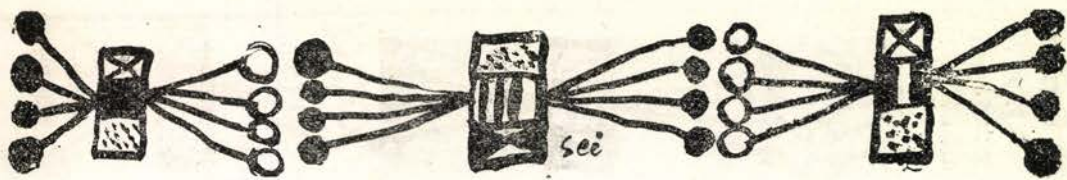
一 時★ 毎月七日午前〇時から
二 時★ N教会で祭典があるの
三 時★ での日だけは起きて
四 時★ いるがその他の日は白
五 時★ 河夜船
六 時★ 大抵起されるのは六時
七 時★ 半、商売柄礼拝だけは
忘れないのが取柄
朝刊は見出しだけでお
茶漬一せんがやっとな

やつとこの時間になるとラジオを止めて娘達が寝るのでどうやら読んだり書いたり出来るようになるのだが、ひるの疲れであまり長つづきしない
わがいびき少しは知つたまま纏入り



東 京 都 川 上 三 太 郎

川上三太郎



川柳塔

大阪市 中島生々庵

ボデービル一ペン腕前見せとうて

F氏賢蔵別出手術

春と云うのに全身痲痺の台に寝る

豊中市 戸田古方

独り居の僧で雨戸も忘れ勝ち

同姓の犯人の名がデカくくと

史論いろくやっぱり西郷さんが好き

萩の趣味も夫びいきの美しく

大阪市 市場没食子

若いのに負けすこつちも妻を撒り

地獄めぐり

それくくに地獄特長見せて噴き

三角島原間の渡航

天草哀史ガイドも声を落したり

家族風呂あいてますとて女中が来

長崎にて

眼鏡橋書いてあるよな河でなし

ホノルル市 内藤草一郎

妻逝ってはっきり子沢山と知り

土語入れて草分け話に箔をつけ

他人事の様に淡々色ざんげ

梯子酒ネオンに赤く濡れながら

もつと呑ませて上げたかったと逝ってから
経験は尊とかるうが又振られ

米子市 三鴨美笑

同い齢おんなじものが着たいらし

順番も来ぬに転動辞令が来

どの様にされても切れぬ縁と知り

一騒ぎさせて桜のあつけなき

東京都 宮田不二

役人の閑居不善も領かれ

怒らない修養をしてよく儲け

車庫の為めだけの車庫前停留所

大阪府 川村好郎

戸をたく夫真夜中と思つてず

お隣の小まめを妻は褒めちぎり

嫁きおくれもうイヤリングもはづして居

秋はまた格別ですとバスガイド

大阪市 正本水客

マッチの軸を耳搔きにして女ひま

アイロンを片附けてから飯にする

邪魔つけなものイヤリングと携帯ラジオ

前身を疑う程に三味がひけ

子を置いて出られる様に妻もなり

近すけば山羊はゆっくり道をあげ

大阪市 丸尾潮花

アルサロへ勤めに出して火をおこし

生活は産みの母さえ忘れ勝ち

貰うても嫁つてもよいと高う居る

獄中で書けば日記も金になり

気遣いの真似さえしたい日がつづく

大阪市 北川春巢

裏口は妻にまかした子の受験
福岡医学会出席(四句)

特二みな官費旅行の顔してす

惚れちようバイなど、博多の酒をくみ

学会であんじよ晩酌ぐせがつき

帰阪して青信号もなつかしや

山根白星氏の歓迎を受ける

おしほりも博多のぬくみ心地よし
奈良県 尾崎方正

夫婦愛あんな怪我でも附添われ

痛いくくと妻にあまえる声を立て

停年へ髪なお黒く手弁当

大阪市 武部香林

おばあさんの病氣置き薬で治り

退職金其半分は既に呑み

雑談に父も這入って父らしく

そんなとこで小便すなど風が吹き

大阪市 木下幽王

生きてくさえくれくばえくと云う妻いじらしく

信心をせよと手ぶらの見舞が来

看護婦につかませといてやと病人気を使い

あんまりごて過ぎて病人放つとかれ

ひゞの入った茶椀よあんたはねてなはれ

私なら腸ネン転を起しそなゴルフ

おめかけになつて益々いけすなり

出雲市 尼緑之助

気の弱い同志で無為な愚痴ばかり

暮し向き花の四月も馴れ足で

かゝる市もよからん菜の花盛り

大阪市 水谷竹荘



母の膝子供甘える場所にする
酒ぐせを知ってる妻はさからわす

下関市 弘津柳慶

日曜日父珍らしく等持ち

重要な書類かとのぞけば小唄集

女事務社長の駄洒落が解しかね

仮病とは知って、母が床をとり

鳥取市 杉谷湖山

気をつけて行くと四十を旅に出し

統計はどうあろうともまだ赤字

広島市 国弘半休

表向きだけの好意を見透され

栄転の荷物役得した荷物

只並ぶだけの入園式がすみ

出迎えをすっぱ抜く気の途中下車

八代市 佐野ト占

騒がねば労組意気地なしにされ

鑑賞をされに舞妓がやって来た

春の日へ足投げ出してる機械あみ

ローカルの駅長かつぎ屋と仲がよし

兵庫県 小沢史葉

信仰へ弱い心を託しきり

老けたとは云わずお元氣なお元氣な

信用をつなぐ見せ金までも借り

尼崎市 小林文月

電話では他人のような声を出し

大阪市 富岡淡舟
サラリーはオーバの半分しかないの
机叩いてお前等は黙っとれ
領けば妻心得て爛をする
大阪市 飯降白香
理屈には勝ったが後の味気なさ
破れ扉の向うに三笠山が見え
独占慾五十女の執拗な
媚ること知った老嬢のいやらしく
奈良県 西辻竹青
学資にも困らないのが落第し
春だのに我が懐の淋しかり
心得て妓は糸をしめなおし
防府市 長野井蛙
手古摺った押売り妻が撃退し
盲判押すにわざ／＼眼鏡替え
掃きないつもりさ／＼と鍵をかけ
布施市 森下愛論
当分はお遊戯ばかりにランドセル
大阪市 太田良子
そんな事あったんかいなと二日酔
妻の留守子の留守今日は昼寝にしよ
酔うた時聞いたらやっぱり行ったらし
大阪市 松江梅里
貴重品預ける程も持っていないす
旗も振る駅長がいて無事故なり
やけくそで来てますのんや花見酒
顔ぶれに名士を揃へ踏み倒し
岡山県 直原七面山
我が道を行った揚句の父無し子

庶務課長サービス手品もせにやならず
疼くよな恋がしたいとマダム酔い
番号がどうしたのよと女子大出
慾情へ油を注ぐ三の糸

春の娘よ僕と囁く気はないか

二号と子が出来て居るとは露知らで

雷の音が好きよと囁く娘

嘘に嘘重ねて刑務所のお世話

持参金そんなら見合してみよう

大阪市 西森花村

根が生えた様に動かぬ露天商

タコ焼の店にも桜散りかゝり

新参は慰安会にも肩が凝り

春の土み／＼すのび／＼した暮し

案内記すぐにもバスに乗れるよう

拝観料そんなら賽銭止めとこか

鳥取市 河村日満

子へ便り書く妻老けて老けて見え

皆花見ですと日直そっけなし

挨拶と云う名で釘を打たれけり

でも社長さんと怒らす事を云う

出さぬとは云わずこれだけとも云わず

兵庫県 田代尋四

とわ云うて赤に投票したくなく

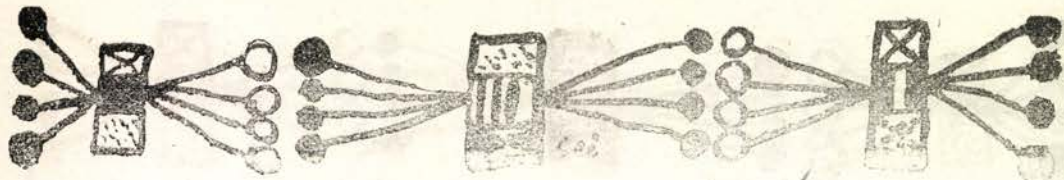
キスしてとマダム甘えるときもあり

花よりもお酒の好きな女医と酔い

恋知ったらしい女の美しく

岡山県 福島鉄児

岡山県 服部十九平



エンコしたバスにも桜の花が散り、
陽炎の理を子に聞かすピクニック

兵庫県 若林 草右

観光のバス揺れながら黒田節

大阪府 足立 春雄

医学の進歩おれの病氣にないらしい

高知県 大西 迷窓

夜桜のことだけ女房に報告し

嘘云うて行くのに弁当つめてくれ
躊躇する理性を女もう見抜き

下関市 坂田 良坊

仮病とは知らず診察念が入り

社命には無い温泉の町で途中下車
虚勢だとわかるビールを又抜き

下関市 石川 侃流洞

サイン攻めパトロン小さく立たされる
パトロンが愛つたらしい髪型の

裏門から補欠の補欠が入社する

尼崎市 長谷川 三司

切り抜きを溜めていつ読む日とてなし

風の音妻も目ざめて孫のこと

広島県 山田 季賛

長生きの父に貯まらぬは金

子の智慧も父に似て居るへボ将棋
共稼ぎ父母へチョッピリ気兼ねする

大阪府 山本 葉光

あきらめてこゝろしづかになるよりすべなし
散髪の椅子で居眠る花ぐもり

倉敷市 木村 千容

引退るなら私をさきに辞任させて

ダイヤルのこゝもあしこも歌うてる
逆境をよく知って居る懐手

親友係長に昇進

花よりもさきにひとはな咲かせたり

石川県 那谷 光郎

逢曳きの帰り毛虫をつけて来る
ニューセンスなど草月流を活け

大阪府 木村 水堂

歯科医から機嫌の悪い顔戻り
貞操を家裁は金に換えてくれ

おとなしくラジオの唄で家で飲み

倉敷市 梶原 一善

放火までするとは嫉妬恐ろしや
奥さんの名で手切金届けられ

間貸して老婦けっこう食うて居る
へそくって居たと妻を見直した

吾れも凡人忠言を入れなんだ

岡山県 田村 藤波

虫の穴一つを質屋見逃さず

母いませ間は縁起に逆わす

サービスを賞めてもチップはくれはらず
就職の通知が自殺して届き

岡山県 岡田 夜潮

裸婦お湯できようにタオルあやつって
春雨に一人濡れてはあきまへん

余りにも春を讀えて金が要り
病院の窓の花見で満足し

おしやべりがテストされてるとも知らず

茨木市 下山 清潮

葉桜を追ってプランを立直し

犬まで飼う家が子供にけちけちし
老先を気にしな養老院もある

岡山県 本田 恵二郎

湯を押せば水が出て来る三等車
こと恋となると演出ますくなり

ものは褒めとくもんだとうくればはった

大阪府 真鍋 一瓢

うちの娘もあわれ美人の友は避け
いさぎよう死ぬなんてのも嘘のうち

片言が喋れて黒ン坊にもハロー
棚晒しなのか男の四十過ぎ

花笑い鳥歌う迷い子だけが泣き
亡き人の位牌へ済まぬ返事だが

借金がなけりや今夜は良い月夜
貧乏も聞けばまだ上ある長屋

探す字をいわずに辞書を借りに来る
ウオッチを見えないとこに個人主義

淋しさのあまり持物呉れる姉
大阪府 後藤 梅志

入学のもうその日から殴って来
母あちやんを貰え〜と子がねだり

おどかしをつき混ぜねだる男の子
嫁く前の別れを惜しむ花を生け

相談所金の工面はしてくれず
渡し船猫捨てに行く人も乗り

人間の弱き人間だけが知り
合格を寿ぐような花だより

倉敷市 藤井 春日

元憲兵パチンコプロで食うて居り

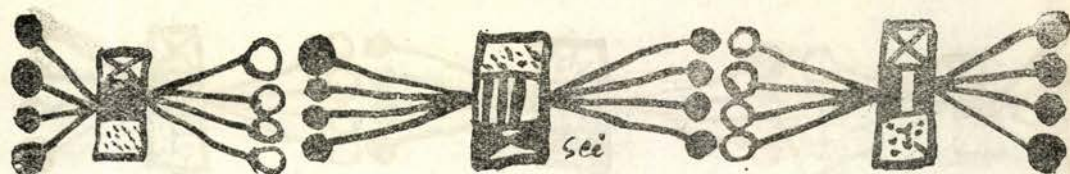
倉敷市 藤井 春日

倉敷市 藤井 春日

倉敷市 藤井 春日

倉敷市 藤井 春日

しらくあすとるにふろりまきつう
ニニ子車



二時までも飲ませますのと妻の眼が
こゝに亦閑あり正直動まらず

岡山市 津田 麦太楼

手強い二号で奥さんの事ばかり云い

老人とはつきり云われ引退り

誰一人纏りを戻しに來て呉れず

キリ〜と三味を継ぐ妓の真剣さ

春の雪汽車の煙の温かき

ダンサーの亭主だそうな葱を買い

坊さんのお次へ座る年令になり

小ざっぱりした先妻と行違ひ

ハイボールのコツも覚えた美人秘書

なんぼでも呑むのでお酌ほっとかれ

税務吏へ父の雄弁などれず

慾情の排け場がないかボデービル

送詞謝詞仲居はすらかしこまり

子宮痛亭主の事はもう云わす

養老院功七級をひけらかし

夕暮のバックミラーのきれいすぎ

いゝともあったと離婚否定せず

税金に泣くとは見えぬ店構

正直に話し告白めいて来る

腕時計つけてた方が遅刻をし

平社員でもよし一人を愛してくれる人

税金を負けて貰って来た殊勳

人相の悪い男に売る庖丁

吹田市 橋 本幸 男

米子市 小 西 雄 々

堺市 高 崎 雄 声

大阪市 吾 郷 玲 人

✓万才師だからとて家にある悩み

朝帰り視線は妻の方が避け

洋服に下駄恐妻も老いたりな

抵抗をされて唇だけ盗み

✓花見どころか次が出来次が出来

牡丹刷毛今夜は誰を欺そうか

この手筋女苦勞とぬかしたり

晚酌をやめればどこぞ悪いのん

アルサロは皆人妻でない素振り

白浜へつれてつたるとは酔うており

式挙げる迄はとお預け喰っており

次男坊落第しても悔いていす

隠し芸になり存在の輝かし

押売りへピクともしない子沢山

さく〜〜きうりをきぎむ晋たのし

女サラリーマン色気を抜いた服で来る

貰い子と言われたくなく甘やかし

上役が居た駅前を廻れ右

夜桜で見る日本髪映画めき

小心はすぐ本性を出したが

何気ない言葉も好きだから嬉し

故郷はよきもの母の膝に似て

去った娘を春眠とろり夢にみる

欠勤の理由二分ですむ用事

吹田市 松 永 東 岸 子

岡山市 菊 田 い さ む

岡山県 岡 田 青 果

西宮市 若 本 多 久 志

島根県 藤 井 明 朗

二階借りそろ〜嫁の話も出

大阪府 神谷 凡九郎

グレイにもならず禿げてくのが寂し

競走の様に雨だれおちて見え

うぬぼれが余計な口をはさみに來

軒店を貸して未亡人ひとそと居る

焼鳥のくしは離れぬつもりで居

大阪府 山 川 阿 茶

へそくりを政治献金する身分

あの母であつたればこそ仕えきり

大阪府 清 水 望 峯

お巡りと話せばみんな見て通り

仲のよい夫婦耳打ちばかりして

倉敷市 水 谷 谷 水

老衰れ養子夫婦にあてられて

御息をあれがオモチャにした女

税金を納めに淋しそうに行く

妻君にまた逃げられたのか休み

小児麻痺不貞の妻に養われ

急用もないのに信号守られず

端た酒それでもいちびりたい若さ

大阪市 伊 達 堰 子

泣き落すその古い手に又かゝり

花の京屋根拜んどく本願寺

大阪市 不 二 田 一 三 夫

妻盲腸を手術する

頭張れヨ妻うなすいて手術室

医術にはすまぬが神に手を合わせ

ばら撒いた米駅員も拾うてやり

来る春も待つすぬか名流こころ

前足は遠くへの子供を泣かせと

奥様に化けっ切れない仇っぼさ
暑いからもう止めましたボデイビル
胃袋があゝまたかいな塩こんぶ
エネルギー三分の一パスへすて
電報も真昼に来れば驚かす

兵庫県 酒井ひか平

横断のチャンス一ふく吸って待ち

ハイキング杖に仕込んだ竿で釣り

山蟹がチヨコく逃げるハイキング

町政は山紫水明とは行かず

ゆで玉子どうやら降って来そうなり

夜桜でちやんとあるのを見付けられ

取り巻きで来といてマツチ三つとり

老婆と主人が呼んでるのも知らず

キッス位いして帰りましたよう花吹雪

保険医総辞退

これからは神だけ頼ることに決め

耐飲んで凍死したのを例に引き

野辺の花雪や霜にも勝った艶

酔払いのタンカ留置場から聞こえ

税務署もさるものこゝで怒らさず

突出しの辻占凶が見当らず

ざらにある顔だが人気とは恐し

商売があほらしなって来る人出

悪運が強いと出世まれる

今度こそひよっと効くか加美の素

お前はまだ若いと理屈負けかゝり

珍らしや完納感謝の手紙が来
退職金投るよな商売してしま

岡山県 戸田喜楽

口答えする年頃の横座り

アルバムへ幸福だった腫を閉じる

憧れが見事破れた都心の灯

✓ 金銭で済まぬと云うが金をほり

✓ あの顔にこんなにもいる化粧代

日曜の雨麻雀が呼びに来る

岡山市 池田古心

冬眠はもうして居れぬ恋の春

女秘書夫婦取りで給仕する

小豆島御利益船で頓死する

東京都 石居高志

✓ 宿直を信じる妻に済まぬ朝

✓ 宿直が胆を冷やした救急車

欠席のアベック社長にばかり逢い

長生きの死へ賑やかな台所

相談にもう来る頃と母は知り

岡山県 土井雷山

妾宅の鸚鵡キッスを派手に真似

舌を出すからしくじったことが知れ

物識りの子どもがヒソの毒で死に

大阪府 早川清生

ひとり飲めば時計淋しき音きざむ

おみくじを引いて拜みもせんと去に

奉公にゆく娘桜とともに撒り

壮語する人の垢じむ袷見てた

✓ タクシーにひとり乗っても隅におり

✓ 運転手一〇局指して稼ぎに出

慰霊碑に名を連ねたる知事市長

海女あわれ慕さえ青い海を向き

大阪市 武部若菜

生きて居るうちだ五に云い募り

婦人会そも良人とは鶴の如し

焼いもを片づけ金魚屋に替わり

小松市 伊藤茶仏

借電話していて僕が社長です

今のうち養老院に寄附しとき

受付のサービスタを拭いて押し

運転手こゝはどやと酔がさめ

✓ 途中下車した温泉が五里も先き

✓ 温泉のマツチで知れた途中下車

極道のなれの果です芸達者

石川県 中松恒雄

✓ 同権は同権おごるのは男

✓ 税務署へどなって来たとき大きく出

✓ 髯面にソフトクリームでれくさし

✓ 死んだなら後妻を貰うでしようと思き

✓ 金廻り先ず妻君が派手になり

堺市 辻圭水

失言をしても陣笠騒がれず

女形の主役の何と強いこと

育見本と違う病気に慌てたり

高知市 有友玲羊

ロマンズグレー金がないのか持てもせず

科学的にと云うたを無神論にされ

気が疲れましたと都会から帰り





緑蔭

あれこれ話

東野大八

真畫の暗黒

正木ひろしの「裁判官」やこれを映画にした「真畫の暗黒」の評判などで、この二つの作品の素材である八海事件は一躍有名になった。ところでこの八海事件を担当した当時の探査課長が岐阜にいた。早速インタヴューを試みてみたら、彼頭を振ってガン強にこの事件に関する話を拒否した。「最高裁でまだ刑の裁定をしていないから……」というのが理由である。そして正木ひろしの著書に対する担当検事の書いた「八海事件の真相」という本を借してくれた。いろいろ話をハグらかした末、彼のいわく「いらんことをいうとクビになりますからねえ」

芸術価値

ある美術展の審査会場へ出かけて、大家連の審査ぶりを詳々に拝見した。彼等は七名の奇效である。偶效だと結論が出ていくからであらう。しかし現実の一つの作品が三対三になった。一人が白紙で批評優秀の権利を放棄したからである。

「そんなことをいわずに、どち

らかにきめて下さいよ」

と係員が困った顔でいった。

「定めて貰わねば、夕食が遅れて陳列や準備に困るんです」

とも別の係員がいった。人のいゝその大家は、頭を二、三べんゴシ掻いて、然し至極平然とこう

いったものである。

「じゃあ、眼をつぶってやりま

すよ、ハイ、こっち」

手ま借す

義手には二種類ある。一つは常用義手といって手の形をしている

が、今一つは作業用義手といっ

て、鋭く冷たい手カギみたいなの

から出来上っている代物である

。昔アイアングロー鉄の爪とい

う映画があつて、この鉄の爪の怖

ろしさに幼い私は震え上つたもの

だ。それからアメリカ映画の海賊

にも、よくこの鉄の爪が出てく

る。ピーターパンのフックス船長

などが貰つた。気味の悪いこんな

奴を、幾ら置つても私はつける気

がしない。ところが、その作業用

の鉄の爪をどうしても作ってくれ

と役場から再三再四電話があり、

係員までやってきた。

「なぜそうつけたがるんだ」ときくと

「身体傷害者の予算が余つて貴

方に作つて貰わねば、金が残つて

事務上困るんです。こちらを助け

ると思つて作つて下さい」

不自由なのは、こちらの手ばかり

ではなさそうである。

批評家

二年がよりで三億円もかけた黒

沢明の「生きもの」記録」より十

五日間でその二十分の一もかゝら

なかつた「二等兵物語」の方が大

当りをとつた。その当りに気をよ

くして「続二等兵物語」を撮つた

ら木下恵介の「野菊の如き君なり

き」を食つてしまつた。然し映画

批評家はこれについて一切何もい

わなかつた。話がバカバカしいの

か、それとも大衆の愚かさに手放

してアキレタのか。こゝんところ

のカネ合に、本当の批判や批評が

ありそらだと思ふんだが……。

裏の裏

名古屋に久しぶりに遊びに出

た。そこで映画編集者の某に会

つた。以下私と彼の会話

「むかし奥の奥」という雑誌

があつたのを覚えてるか。エロ

とスリラーと探訪で売つた本だ

が、よく当てたんだ。そこでね、

そいつにヒントを得て「裏の裏」

というのを作つて出してみたん

だ。

「当たらなかつたらう」

「さつぱりでね、弱つたよ」

「そりやそらだ、当らぬのも道理だよ、裏の裏は表じゃないからね」

名マネージャー

岐阜城を稲葉城の昔に再現しよ

うと、目下そのお城建設がはじま

つてゐる。岐阜にロケに来た長谷

川一夫に、この岐阜城再建の話を

したら「織田信長とは私も息子

(林成年)も縁があるので、無償

で後援させて頂きましよう、建設

資金獲得の興行ぐらゐは私で上げ

ればタダでサービスさせて貰いま

すよ」とのうまい返事を得た。元氣

づいた建設委員会が、その段どり

をつけようとしたら、この人氣俳

優のマネージャーが「衣裳も音曲

も岐阜のものじゃ先生が泣きます

よ、やつぱりこちらから連れてい

つたもんでなくちゃあ」との話に

「ではその面の方もそちらでお

世話願へるんで……」

「無償で援助したいと仰有るの

は、いいですが、長谷川先生だけ

なんです。だからこの方の実費

ぐらゐは持つて頂かなくちゃあ、

それが話の筋からいつても本當じ

やないですか」

そこでパチパチとそろばんをは

じいてみた。衣裳はこれこれ職方

は最低しめて十五人、汽車は二等

で宿は一等、それから一応の接待

は別に出演料ややめとこと、と

いうことにどうしても落ちつた

た。その返事にそのマネージャー

にこりともせずこういつたもので

ある。

「惜しいですね。長谷川先生の義侠的サービスも仇ですネ」

岐阜で「映画百科展」という催

し物を当地のデパートで催した。

各映画館では、腕によりをかけて、

近日封切の大作もの、ポスター、

スチールの飾りつけで大童わ。

その中で、一コマの映画館では、

障子を二枚持ち込んできつたら

一体何をするんですか、とい

つたらまあ見て下さい、と係り

は自信まんまん。

やがて出来上つたところで拝見

におよぶと、その新品の障子をサ

ンまでへし折つてメチャクに穴

をあけ、中に等身大の男女が海水

着姿で相擁している写真を置いた。

その障子の傍らに大書してい

わく

「目下問題の石原慎太郎原作の

「太陽の季節」の堂々の映画化」

とある。この小説をお読みの方は

先刻御承知だろうが、主人公の若

者が、女性に求愛する場面に障子

はなるのだが、そこでナニにナニ

は、障子にこよなき意味をふく

め、その魂胆でアツとばかりにア

ッピールしようとならつたものら

しい。

ところでその若い係員、このア

イデアの並々ならぬところを誰か

に認めて貰いたくなつたか、折よ

く来合せたそのデパートの売子の

一人をつかまえて、その感想をき

いたところ、彼女答えていわく。

「サンまで折らなかつたって、い

いじゃないの、第一勿体ないワ」

大物のまゝに
運送の世に
なり

同

舟

近

詠

松山市 前田 伍健
憲法論みんな学者の口々振り
祝 梨里さん御結婚
よき父母とよき夫を得てよき船出
筈は竹になったと失業者

長野県 高峰 柳児
米持って寄る母の会つゝましい
転任は犬の処分を持てあまし
遠吠えに似た元大臣の車中談

和歌山市 秋 月 宏 方
コッココッコ時計会社のスト知らず
俺が俺がとおでんやで気焰
三面鏡ちと鼻低いプロフィール
あこがれは養老院だとは淋し
婚約者電話も少し使えず

大阪府 石 田 沐 天
判決へきてしめされて法吏立ち
栗おこしメーション化した人だから
モード喫茶尻のあたりへ羽根をつけ
学卒えてバイトの頃の職もなし
整形もしたのに齡は容赦せず

今治市 長 野 文 庫
貸しめせず委細拜眉をつつ放し
催促の声亮る時の声でなし
働き蜂と云う恰好の定期券
凡々と着て寒鮒と一騎討
骨董屋推古のものにしてしま
縁のない人につまらぬ文化財

大洲市 米 沢 暁 明
今日までの縁にはしたくないテ
下っ端は伝えて置くと云っただけ
御用聞ほかの使いたのまれる
門司市 菊川 泰 平 楽
花便りどこにしようかと気の多し
赤ん坊の寝顔如来に似て奈し
持つべきは友なり痛いとこをつき



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔二七五〕
紐つけて引つばりましょか
イヤリング (花村)

国土によって、時代によって
環境によって、人おの／＼に
よって違うであろうが、作者
の眼には浅薄な女性の虚飾と
して映ったので、この句のよ
うに揶揄したのである。イヤ
リングがすることが、よいか、
わるいかは別として一つの観
方には違くない。この句に同
感の人たちは微笑を洩さず
はいられないであろうし、イ
ヤリング美を感じる人たちに
は一種の侮蔑とうけとるであ
らう。

〔二七六〕
眼に注射誰れか医学を信ぜ
ざる (日満)

何んの不思議もない訳だ。そ
こを巧みにとらえたのが、こ
の句である。

〔二七八〕
出刃庖丁らしくポタ／＼水
が垂れ (水客)

今でも不治の病のあること
を認めない訳にはいか
ない、新しい病気が次々に発
見されて手のつけようのない
こともいふないが、それに
しても医学の進歩したことを
疑う余地はないだろう。眼に
注射と聞いただけでも、ドキ
ッとするが、医者立場から
云えば、今では何んでもない
ことかも知れない。たしかに
この句は一つの発見である。

〔二七七〕
ババママをどなりつけてる
一人つ子 (七面山)

ババママにとって、一人つ
子は育てるといふよりも寧
ろ、一つの玩具だという観方
が出来るであろう。あまやか
されて育った一人つ子が、小
さなタイラントになったとて

判らないが、まア代議士戦と
しておこう。さて立候補した
となると急に人間が弱くなっ
て、誰にでも頭を下げたくな
る、イヤ下げるものである。
なるほど、この句のように尾
があれば振って見せたくなる
ものである。これぐらい皮
肉で、しかも痛烈に立候補者
の心臓をゆさぶった句は稀れ
であろう。

〔二七九〕
尾があれば振って見せたい
立候補 (花村)

ボディビル胸へ筋肉持ち上げる

中七下五の用語、表現は理屈に

合わないようにも見えますが、不思議に筋肉の隆々と動きもり上るのがせまっています。仲々いななと思っております。

胸だけは張って歩くと手に

教へ

上り切った峠で胸を張って

みる

元氣な若人たち。七面山さんの

は句風の上からも少し色艶の多いものはないかと思いましたが、最後にチエツクの残ったのはこの句でした。思ひきった、素直な作句をつまけてこれただけのことはあるなと思わせる佳句です。

胸算用と打算のにもちこんだ句も

香典へ胸算用の礼を云い

古川柳の「泣くなくもよい方をとるかたみわけ」の連作のようです。

胸三寸啖呵は法の際をゆく

いゝ度胸首飛ぶような印をする

胸叩くばかり一向のつてこ

胸の花つけてもボスのつら

がまへ

この胸は肚につながら胸です。

肚ほどの大人物ではなさそうにも思えます。法律すれ／＼のタンカを切ったり、片肌をぬいでボンと胸をたたくところ、正に舞台

のものでしょう。文平さんのボスの句は大衆にきつとうける句でしょう。

惜げなく胸をひろげた母性

愛

乳のます奥さん平気で胸を

開け

せつかくの母性愛の句ですがも

少しなるとか、グット引きつける

ものがほしい。「南無女房乳をの

ませに化けてこい」この古川柳に

は胸も乳房もちやんと見えて来ま

す。

萎びても胸へクルスをのせて

やり

息を引きとってしまったか、ど

うかは読む人の感じ方でもど

なりましようが、胸をみつめる斗

病風景の真剣な一コマ、クルスは

十字架です。

早合点胸の病にされちまい

胸ぐらを取られて吃る人違

い

両方とも思いちがいの句。「一応

面白いのですが、批判へ、詩への

精進を祈ります。

手土産で胸のもや／＼捨て

にくる

言葉にプレーがかかっているせ

いか、この句の面白さには多少深

味があります。

それからの二人は楽に物が

いえ

胸をいわずに胸が主題に生きて

います。十七音字です。説明語の

許されるのは感動が非常に強くて

選語の余裕をあたえないような時

では、自然に受取られはしますけ

れど、そんな時にはその説明語が

かえって衝動の強さをデカに感じ

させるものです。一番最初の柳斐

さんの「この胸の骨と命を換えた

訳」などがそれです。一般には想

をねり、構をかまえてなるべく説

明的な表現は時やむを得ず残った

でもとゆう時やむを得ず残った説

明的なことばは意外に成功するこ

ともあります。

妥協する頃合胸に問うて見

る

知性の分量の多い句。指針めい

たものも感ぜられず。

川柳は客観的要素の多い詩で

す。批判とはつまり知性の判断か

ら生れます。そして批判を通して

陶冶がなされるのです。

切開をして胸の傷自慢がり

人聞ずい分おかしなものまで自

慢したがります。これも真理で

しょう。

直路さんは胃潰瘍の開腹手術の

予後だといつて来ておられます

が、その中で、題が「胸」でなく

「腹」だったらと

腹切つてまた御自慢が一つ

ふえ

私も昨年手術したあと英雄氣ど

りでおしやべりしたことを思い出

します。

研究題 「水」
(メ切) 六月十五日
(発表) 八月号予定
(投句先)
豊中市木町三丁目二〇一
戸田 古方

五月

杉本辰一(大阪府) 正

安部立美(大阪市) 正

以上一三夫氏推薦

有友玲羊(高知市) 正

建沼康之介(高知県) 正

明神耕生(高知県) 正

以上迷窓氏推薦

中島可十(滋賀県) 正

野口迷羊(滋賀県) 正

黄瀬木人(滋賀県) 正

小島斗志(滋賀県) 正

谷口苦峯(滋賀県) 正

以上春渠氏推薦

川柳まつりに就て

★川柳の年中行事として多大な人

気をよんでいる川柳まつりが

本社では本年は七月八日(日)に

開催される。就ては川柳各支部並

びに川柳系各会は全国一斉に路郎

先生の誕生日七月十日に賑々敷句

会を開催されたい(万一この日

差支える場合はその前後の日)

★この日には特別兼題(路郎出題

並びに選)が一題課される。課題

は各会宛に後報する。この特別課

題の第一席入賞者に路郎賞を、そ

の所属支部又は川柳系会へ優勝楯

を贈る(楯は翌年の川柳川柳まつ

りの二週間前に返還すること)

★特別課題は一人三句まで、提出

句はタテ六寸ヨコ一寸二分の柳箋

に一句ずつ読み易い書体で書くこ

と、その裏面に句主の住所・氏

名・雅号及び所属の会名を明記さ

に送付されたい(切手代用可)

小児科 平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

世は下今の所はいいからしんぞおつて子あ

笑顔ヒラ子法に傍てお息づかい



酋長の娘が今に酒の芸

神様にあんじょういかれてもお蔭

己が足食う蛸に似て給血者

たまさかの晨起き女房の邪魔に

金費う算段もして年度末

部落へもテレビの時間割貼られ

器用貧乏西瓜番小屋頼まれる

後の祭りになって晝は復延ばし

惜しい腕短気が一つきずにされ

ふるさとと蜜柑景氣の家が建ち

地下足袋の歸えりも花を提げて春

この頃の羽振りは言葉まで変り

屋上で希望に燃える新入社

団結のなんと花見へ酔いに行き

場所柄をわきまえてての咳払い

株で損小鳥で儲ける主婦日記

ほろくそに言われる社員とは見

造船景氣嘔う吉野の筏乗り

餅箱に若かりし日の父の筆

往年の蕩児に語る売春法

オルゴール故障たの過去を閉じ

女篇ばかりを書いて閑な事務

吹けば飛ぶような男の智慧を借る

罪名をはっきり聞いてお辞儀する

妻になる顔へ夫になる視線

見合結婚あんたがするんかと言

すねる事おぼえて主婦も板につき

新家庭どちらもお食べるのがお好き

同 小川 静観堂

同 山根 素瓢

同 小浜 牧人

同 永尾 英断

同 阿部 かつみ

同 中島 可十

同 清水 節子

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

共稼ぎ夫に家事はさせない氣

もう一本は妻の返事でちがう味

踊る場も予算に入れて宴を張り

日帰りの旅に葉のお守りの

今日よりは願みなくて春を売り

肺病の癒らぬうちに胃もやられ

いゝ返事してプランコを飛降りる

別荘は大小屋だけが焼け残り

白百合のようと言うたが氣に入

人生の午後をドックで静養し

かくなるを岡目八目予言した

あのデモはお医者さんではない

背の君に扁平足が背伸びする

四月十日復職

二年半振りでラッシュの人酔い

謡本開き邪恋の思慕を断つ

爪を噛む癖勉強の嫌いな子

発車ベルつい早口になる別れ

愛人に乗せたベタルのかるいこ

再会は夫婦で来いと手を握り

若死をみな秀才にしてしま

縁談の首尾を聞きたい座はずし

ヘップバーンロングヘヤー

代数も文字も忘れて子が育ち

臨月の膝とも知らず子ががり

ほろ酔いの空巢捕えた花の留守

仲人の肩書にまで氣を配り

目に青葉今年の春も嫁き遅れ

同 横田 放人

同 橋高 薫風子

同 野田 一念

同 吉原 紅月

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

まい。百貨店の建築みたに簡単にはゆきません。

借家や間借をしている人に、毎月、毎月家賃や部屋代を払うなんて馬鹿げている。今のうちに思い切つて借金でもして家を一軒たてたらどうですと忠告してくれる御親切な人がいます。この方なら出来ない相談ではありません。

金がないければ生きてゆかれないのは今の世の中、足らぬでは生きてゆけんでしょうが、ありすぎて不自由だとは氣がついているかどうか。不自由するほどまたしてもらったことがないなんてケチなことはおっしゃいますな。

もつてみなくては不自由に氣がつかんようではまことに心細いかがりです。

ギヴ・アンド・ティク、追うても追うてもつかめないのが自分の影であり、にげても、にげてもついてくるのが自分の影であります。

盗人にとりのこされし窓の月

良寛

五合庵が空巣に荒らされていることなんぞもう眼にも心にも感じてはいないのです。

そんな霞を吸うような仙人の真似なんかと人々はゆうでしよう。

霞じゃありません。霞の如く見えるそこに甘露の味があるので

使つても溜めても金は面白し

錦波



モーニング此の手はどこへ置く山崎

珍客へウロコを散らし妻へ急岡山

原力展戻れば麦の草が待ち

陽春はうらら左遷の汽車にゆれ

鼻声の威力だんだんうすれかけ兵庫

結局は感謝も金で計られる

雨降ってゆるりと飲んで居る花見

関係のないストなのに父憎み滋賀

お相手おそろしくに猪口を出し

嫁いでも勤めることにして嫁岐阜

レコードの数は知れてる二流館

舞踊よりフラッシュ大分

幸せと思えば空気までうまい

このピンチ流石名医の無表情貝塚

ネクタイの柄をナースに気に入れ

斗病の根気親あり妻子あり

採め事が絶えず弁護士派手に活大阪府

四ツの島足を踏んだり踏まれたり

総領が生れスピッツ庭住い

七難をかくすにお茶も華も要り大阪府

退職金嫁った娘にまであてにされ

春宵一刻 価値千金の宿直し

喰い道楽とうく沢庵出せと云松江

焼酎に酔うて桜の枝を折り

上座からあそんだらしい芸が出る

ダイヤルをジャズに合愛媛

麦踏み調子だんくマンボめき

面白いニュースもなしと故郷便り

同

岡崎 一也

同

同

同

辻 文平

同

同

土守ト坊

同

同

加納 幸児

同

同

坂本阿季良

同

同

山河頭光亭

同

同

本多 省三

同

同

舟木与根一

同

同

富永 孝雄

同

同

三円を値切る女の巻煙草貝塚

お互に敬語になって別れる気

学歴があつて大部屋孤独なり

卒業がすめば美人になる苦勞兵庫

映画化と決まる小説読み返し

あえがずにデーゼル山の駅に着き

酒を呑む為の生活切りつめる今治

保護法で有て、貰う気で狂み

まだ生きていた死亡記事で知り

脳線で覚えたことが役にたち岡山

螢光灯だけが文化の藁の屋根

税務署が来て税金を呑んで去に

桜よし空びん抱いてバスにゆれ平田

生活の疲れもんべの膝も抜け

月給で足らず座敷を貸しに出し

満開へきれいな嫁を連れて出る鳥取

平和なる村で年寄順に死に

蝶のとぶようにたもとの女駆け

看板の色も眼に立つ春の駅和歌山

これしきの田地が阻む医療扶助

ゆっくりとしていてくれと茶鳥取

嫁にする娘を両親は連れたがり岸和田

漠然と電光ニュースを読む旅愁

獣性が女にもある特売場

生垣の新芽が匂う立話し群馬

無遠慮と自炊半別けて喰い

新任の課長はうまが合いそう鳥取

内職はなんにするかで論となり

護川 梢月

同

同

同

岡沢 凡志

同

同

中川 堯二

同

同

沼田 三六

同

同

久家代仕男

同

同

鈴木村諷子

同

同

木下 一休

同

同

吉村たけし

同

同

荻原 竹郎

同

岡嶋 芳道

同

人間ある時は夢中になるのもよろしい。が時々には静かになってみることも必要です。人生は真剣勝負、勝とう、勝とうと思いつけながら、
死ぬまいと手を変え品をかえて死に 叱咤郎

ボーイズ・ビー・アンビシャスと明治の初年クラークさんは日本の青年達に教えました。クラークさんは資本主義をつくり出した西洋人の仲間です。自然を征服するとうそぶくのが西洋人の考え方です。希望も、張りも、勇気も持たねばならないでしょうが、悠久なる大河の流れをみつめながら人類文化が発生したことを、黄河百年にして水すむことのない、そこから生れた東洋人の心も人生の大きな指針であることも忘れてはなりません。

資本主義と社会主義。経済の歴史の上では、富国強兵、金ほしやに国民を狩立てた重商主義とその反対の重農主義が対立しました。仏教の精神にも老荘の心の中にも、亦中国五千年の教えの中にも欲望に関することはいっぱいあっても、資本主義的な生き方はみづかりません。
三・四百年の昔、明末に近く中国と西洋の文化の交流がはじまつてから、西洋の心の中にも東洋のものが入れられはじめました。その頃から西洋の資本主義は加速度をつけて進みました。その

洋装のふ腫へりこりと呼吸

卯庵のふるまうランを云えす今を信

ライバルがボディビルとは知^なた兵隊

前川左文字

働きもせずに社会の罪にする

同 小島さぎす

桜散りやつつじの計画できており

同 越智 義人

デパートを歩いて失業さびしがり

同 出原 真奇

人生の裏つくように酒をつぎ

同 香川 雅人

ええとこはこやと療養所へ帰り

同 前川 越山

三代目マンボを聞いた床柱

同 竹内花代子

今日だけは恩賜の片腕つれて行き

同 能村美佐緒

親戚の肩を法事でけなし合

同 児島与呂志

黙秘権つかって居る様に娘泣き

同 森本黒天子

筆不精から筆不精へ便りが来

同 佐内 隆文

借金に気になる頃は病んでおり

同 石橋万古人

家建てる腕をもって、間借りする

同 久米奈良子

鈍研ぐ大工もったいない天気

同 高野むじな

流行がどうのこうのと嫁きおくれ

同 飯尾奇与史

男みなけものにして居る不倅

同 青柳扇子仙

防犯のテストケースにされた町

同 平田 実男

俗物と見せるに一寸骨が折れ

同 中村九呂平

春眠へ妻はラジオを大きくし

同 小田 柳叟

咲いてよし散ってよし春は酒が

同 下岳 周村

丹念な化粧気になる 共稼

同 柿本 古竹

まかせ切った姿で荷台へ妻は掛け

同 藤沢不二郎

一人娘の家出を機に入信し

同 岩原 滔川

道楽のつらさは襟を立てて釣り

同 河井 庸佑

借金をして会長の椅子につき

同 淵川 秀敏

諦^{あきら}めやっぱり好かれる様に書き

同 越智 一水

逝く人の窓鳥籠の餌がかわき

同 景山 素生

横丁の正一合へ今宵また

同 渋谷 博遊

停年の後食うためのボディビル

同 杉本 一鶴

家族主義だからと労基法も無視

同 殺人の女の寝顔へ眼をこらし

御無心があって将棋の手をひかえ

同 徳ですと高いのを出す女店員

気残りのない程費い自首して出

同 幸福は

雨無情駅で飲んでる花見酒

同 洗濯のあわ新婚は派手に立て

いい人がないとは見えぬ眼鼻だち

同 金庫の中に

折角の庭木を切れという家相

同 働ける俸せデモの列にあり

美人ならひきてあまたの職があり

同 なかりけり

鐘が鳴る不良にされる鐘が鳴る

同 借りものの服を着こなす甲斐性

不足なく育ちそろばん下手な妻

同 一九五六、天皇誕生日

島の内を歩いて

同 殺人の女の寝顔へ眼をこらし

信念が強すぎ頑固とも云われ

同

蝶タイで儀式済ませてからの酒

同

失言じゃ無い本音吐いただけ

同

大あぐら社長の腹にある秘策

同

徳ですと高いのを出す女店員

同

綻びたズボンで花見から帰り

同

ロマンスがおちていそうな雨が

同

車酔いしない葉で旅が増え

同

洗濯のあわ新婚は派手に立て

同

へぼ将棋待ったですかと聞き直し

同

働ける俸せデモの列にあり

同

花よりも人目奪ったニューラルック

同

借りものの服を着こなす甲斐性

同

金庫の中に なかりけり

一九五六、天皇誕生日



紅い口之雲のらくらひ



すぐ腹をたてる癖して苦勞せず 石川県

便利屋のように見られる庶務係 広島県

信用をされて私用に使われる 広島県

無口でも子をあやすこつ知って 高知県

M過剰ビヤホールでも顔がきき 須藤 俊江

娘もうアメよりキスの甘さ知り 同

晴天の傘非番日とは見て呉れず 広島県

フライングダークズが邪魔な行楽日 大阪府

友手術したか誌上に句を見せず 熊本県

易に出た三つの恋の一つをし 兵庫縣

浮沈み一度も浮かず世を終り 笠岡市

アンコール目当ての拍手惜し気 大阪府

地下鉄で女の力見てしま 大阪府

猫捨てるさえも家庭の事情にて 声屋市

ピクニック初歩のカメラを振廻し 川西市

ハーモニカ教える方の根が入り 岡山市

立説にすまなく週刊朝日買 静岡縣

阿蘇登山して

へんてつもなき軽石を床におき 京都市

子をだしの花見が雨に濡れてくる 岡山市

仏壇の鉦さえ嫁は遠慮して 山形縣

日曜大工子供のおやつちとへすり 神戸市

失礼の値ぶみをした癖を持ち 大阪府

退屈に退屈なのがやっ来て来た 大阪府

待ちぼうけ四月馬鹿とは気がつ 堺市

石段を教える孫に手を引かれ 宇部市

嫌われたとも思われず文も来ず 岡山縣

佃煮に母戻る日を子は諺ね 今治市

豊作に田舎へ嫁ぐイヤリング 大阪府

塩谷三思楼

同

山口スミ子

同

須藤 俊江

同

寄金 一荷

広瀬我利婆

吉村 一舟

出口日日斎

木山桃仙坊

堤 勝三

山本 立兎

里田一十

沢池紀久江

小田 紫草

鈴木 淳

竹松 九角

矢内満寿子

菊地 白葩

傍島 静馬

米浪進之助

増本 夢人

田中 狂二

鎮波 錦花

高木 涉柿

池内 好日

三好 利次

片便りさくらから便りありました 具塚市

横綱の黒星悪い癖ですみ 香川県

遠足の水筒の名は太く書き 尾崎市

夢の様な話で臍繰り皆いかれ 福岡縣

先輩の精勤ふりて入社出来 大洲市

こんな嫁欲しい白衣にみとられる 奈良市

自転車を飛ばして朝のいい日和 松江市

不足いゝ乍ら畑の産物で生き 石川縣

女房からストもされずに有難や 京都府

寝転んで只空想の部屋となり 岡山市

競輪の惜敗風呂まで持込まれ 大阪府

ぬれて行くと云うの無理に傘持 豊川市

ホルモンの効かぬ自転車古るほど 吳市

徴兵のない青春をボディビル 岸和田市

春姿整形外科の戸をたゞき 大阪府

病院へ行くに髭そり笑われて 鳥取市

親不幸葬儀の時間にまで遅れ 倉敷市

ラッシュニアワー皆そ職を持ち 和歌山縣

伴は故郷を嫌う妻でよし 米子市

弁当箱にも停年が近づいて 高知県

手を握る思いが届く発車ベル 高知市

牛柔順餌をかみかみ車引き 宇部市

津田乃武康

島田 一笑

林 澄子

三上 春雄

尾花 群雀

絹下 南天

岡崎 祥月

塚脇 笑太

白井三林坊

石田 昭月

堤 ちゑ

青木 微醉

金子 紀人

伊藤 光二

岩田天保鏡

矢吹十九一

柏木 天歩

石坂 新雪

建沼康之介

小松 梅林

神田 豊年

新進がグン／＼のびる姿を見ていることは愉快であるし、古豪が句数の多寡を意とせず、句に磨きをかけて行くさまを眺めることもうれしきわみである。しばらく姿を見せなかつた自由朗氏が、悲痛な世相を詠みながら、氏独得のユーモアを漂わせているのも目をみはらせるし、女性作家の眼ざましい躍進ぶりも見道がせない。(略)

青ペン
赤ペン

先生が潮花さんを評して「手八丁、足八丁」と言われた。きょうは女流作家訪問記の取材に夜行列車で走り、あすは婦人部友の会へ飛ぶ、正に足八丁である。手八丁のほうは、踊りの手かと思つたらイヤさにあらず、原稿の清記という一番ワリの悪い仕事から、モロモロの雑事を手一ぱい引受けての大車輪である。「大万川柳ではトップですね」とお祝いと、「今年は何八丁といきまひよか」とは、鼻息八丁ではある。

二十何年ぶりで、また活字と取組むことになった。映画雑誌から川柳誌へと百八十度の転換である。活字といえは、人間で申そうなら、さしずめボクなんか、本欄使用の8ポ活字である。そこへゆくと川雑きつての巨人型、摩天郎さんなんか堂々初号活字の貫祿である。しかし、先生を始め編集局は明朝(みんちやう)スタイルばかりで、残念ながら重役タイプはデット一人忘れたやしませんか「オットー」と名乗りをあげられたのが古方さんである。古方さんのそれは一号活字の、しかも九ゴジックという重量感型ではある。

ふつふつと足ゆめ文の記さるる
一た一た板やしも縮れり
おるおる不
おるおる不



雲を商まじり
（拙）にほまじりて星れ

女は生美つる
林の御去勢

小西富士子さんを

訪ねて

(女流作家訪問記16)

丸尾 潮花

大阪駅から約二時間、山陰線篠山口に至る。それからバスで二十分でデカンショ節の本場篠山町に川雑篠山支部長小西無鬼氏の夫人であり、川雑婦人友の会の理事である富士子さんをお訪ねする。富士子さんは、婦人友の会の皆さんが口を揃えて「お美しい方ですね」と言われる程の美人である。また富士子さんのデカンショ踊りの容姿は篠山観光協会が発行した「丹波高原と篠山」と言う観光案内の中にも見ることが出来る。

「お忙しい処をお邪魔します」「満足なお答えが出来ますかしら」と笑いながら席につかれる富士子さんへ、
「川雑二月号の金泥集の課題「片便り」には大変面白い句が沢山有りまして感心させられたのです。が、たとえば、きさ子さんの郵便屋まで憎らしい片便りとか知恵美さんのこの儘じや化けてやる気の片便り

返信料までもいかれた片便り

の句には思わず笑ってしまいました。最近富士子さんの句が近作柳樽欄でめき／＼と良くなってきました。来られたのに敬服させられているんですが」

「私の句はまずい句ばかりです。でも、皆さんに見て頂いたり賞めて頂くようなものは出来ませんが、皆さんの句を見せて頂くのが好きなんです。石川啄木などが好きでしたし、子供の時から雑誌や小説を読むことがとても好きでした。「片便り」と言う題が屈きました時、キット潮花さんが毎月友の会の方に課題通知をなさるのに投句をされない方がるのであゝした題を出されたのかと私は思っていました」

る。

「違ふんですよ、そうした考えで出したのではないのです。出題をなさいましたのは会長の葎乃先生でしてね。最初は「片思い」にしようかと言っていたらしたので、結局は「片便り」に落ちついたと言ふことなのです。富士子さんが川柳をお始めになられました動機と申しますのは？」

「夫の趣味に同化するつもりでした。」
「そうした動機に句を作られると言ふ方も多いでしょうね」
「でも、とても若い皆さん方について行くと言ふ事は出来そうにも有りません。けれど若い方が一年かかられる処は五年かかっても思っています。いくら作りましても下手なものですから止めようかと思ったりもいたしましたけれど、葎乃先生の新年号の誌上のお言葉などを熟読させて頂きました。努力する気持になりました。川柳を作っていますと視野も自然と

「日蓮宗なのです」
「御主人の句では」
「主人の句で好きな句と言いますと
神様を鈴で起してたのんどき
でしょうか」
「御主人に對しまして川柳を通しまして何か面白い思い出がありませんでしょうか」
「古い話ですけれど、主人が関西土地に務めていました頃だと思ひます。川雑の「近作柳樽」に投句をしていました頃、私の句が二句入選をしまして、主人の句が一句しか入選をしなかつたと言つてね。自分の方が柳歴が古いのに怒ってしばらく近作への投句はしなかつた事が有つた様です。それらもつい最近になりまして、それを話して呉れました」と声を出して笑いながら話される。

「主人は性格が弱い方ですので、句も地味な句が多く、強い線が出ていないのではないかと思つています。信仰をして居ります関係でどうしましても信仰的な句が多いのではないのでしょうか。常に円満と言ふ事を口にして居りますし、路郎先生の数多い名句のなかでも
一握りあゝ人生は和にしかず
の句が一番好きらしいのです。御町内でも主人のそうした信仰的なところだけを買われているようです。」

「一寸へんねしを起されたんですね。さぞその当時は残念だったのでしょうね」
「篠山支部の方は潮花さんの句を好かれる方が多いですよ」
「繊細なところを好いて下さるのでしょう」
桜の花にしぶく雨はまだ止もうともしない。冷たく水に浮く水運がしつかりと古城の影を抱いて動かない。

次は「池上知恵美さんを訪ねて」

柳界 展望



▼本社六月旬会は七日(木)午後六時から下寺町市バス停前の光明寺で山雨楼忌を修することとした。奮って集えられた。▼南区医師会杏林川柳会(大阪市)は五月二十日午後二時から瑠枝郎居で開催。五時から交楽座を觀賞作句。▼島野工業株式会社の3・3・3川柳会(堺市)は二周年記念旬会を五月六日午後一時から方違神社裏「いしもと」で開催。▼富柳旬会(富田林市)は五月五日午後一時から富田林市役所日本間で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)は五月二十一日午後六時半から粉浜親和寮で例会開催。▼既報鳥取市復興記念山陰川柳大会は五月十三日午前十時から鳥取市児童会館で盛大に開会本社から麻生路郎師御夫妻を初め春果・淡舟・潮花・愛二・梅里・貴山・雄希・緑之助・美笑・無鬼・ひか平・久米雄・七面山・雷山・古心の各氏出席、三朝温泉、鳥取砂丘見物、傘おどりの

余興に飲を尽した以上何れも路郎主幹出席。川雑淀川支部旬会(大阪市)は六月四日午後六時から武部香林居で開催兼題「壁」「自動車」「交渉」の三題。▼大阪市交通局川柳会は六月二十日(水)午後五時から扇町の交通局病院サニウムで開催兼題「貸本」「新妻」「お言葉」の三題。▼川雑岡山支部旬会は四月十五日苦田温泉へ観桜吟行を催された。▼川雑倉敷支部(岡山県)五月例会は五日午後一時から水島慈愛幼稚園で開催終つて柳談に花が咲き意義ある旬会であつた由。▼川雑篠山支部(兵庫県)旬会は五月六日開催。▼川雑島支部復活旬会は四月二十一日午後一時延寿荘で開催。▼川雑下関支部旬会は五月十三日に開催。▼川雑備前支部旬会(岡山県)は四月二十一日、大森娛句楽氏三十七年の鉄道生活勇退記念旬会として娛句楽居で開催。▼京浜川柳大会(第十三次)が四月廿九日正午から横浜

市西区、県立図書館ホールで開催された。▼岡山電報局川柳同好会四月旬会は二十一日午後六時同局で開催。▼三井造船川柳部四月例会は二十四日午後六時から三友クラブで開催。▼税のしるべ七周年記念山陽地区川柳大会は四月二十日午後五時半から岡山市下石井遺族会館で開催。▼伊丹与詩雄氏(前吉永駅長)は今回足立駅長に榮転。岡山県阿哲郡新町町足立駅国鉄宿舎に転居。▼速水真珠洞氏(福岡市)は四月十四日富士五湖から箱根、伊豆半島周遊下田で唐人お吉の遺物參觀東京と約半ヶ月振り帰福された。▼星川陽石氏(玉野市)からの消息によれば六月上旬春季文化祭玉野市川柳大会を同市で開催されること。▼川柳きやり吟社(東京都)では第十二回京浜川柳大会会報を四月廿一日「きやり」別冊として刊行した。▼生方敏郎氏(東京都)は、四月二十三日大阪の電話帳で路郎師宅を知り二十年振りに同師と南地で酒盃をともにしお互いの健在を祝福された。▼夜婦東されたこと。▼小畑自由朗氏(姫路市)はこのほど川柳映画「親子は他人の始り」をテーマとしたシナリオを執筆された上映の事を期待している。▼小川静観堂氏(伊丹市)の令息が本年三月神戸医大卒業四月十五日から阪大病院に勤務された由。▼西村酔香氏(逗子市)は五月三日来阪、南地で路郎師と酒盃を傾け歓談、帰途吉井

正誤

▼五月号、十七頁一段十五行目の「世開態」を「世間体」に訂正

川雑案内

八千七百十三字 六行・金二百四十圓(郵金)
 切手代用可・改換・郵購・送付・郵購案内
 内編・編者・編輯部

- ★ 大阪市内への御用件は一件に就て一〇〇円交通費不要・品物は一件三貫匁位二尺立方以内・大阪市西成区北吉田町二〇〇 〇ひまわり社 電話 天下茶屋 五五三番
- ★ 大阪で一番古い回覧雑誌社です。新刊本「セスター(新書版)」の回覧もします。御希望の方には詳細お知らせします。妄夢経営のひまわり社へ 電話 天下茶屋 五五三番
- ★ 川雑・婦人友の会の会員を募る。會長麻生霞乃女士。作品は「川柳雑誌」の金泥集に掲載されます。会費年額百二十円希望者は川柳雑誌内婦人友の会係宛
- ★ 川柳雑誌社支部新設を希望される方は規則書を請求されない支部に適切な指導のない場合の御相談にも応じます。社内支部新設係宛に申込まれたし。
- ★ 「川柳雑誌」三四〇号(三〇年九月一日発行)山雨楼追悼御不用の方は定価でお譲り下さい。川柳雑誌社内 ABC 生
- ★ ギャイオリン講習希望の方は枚岡絃楽教室(枚岡市河内町六三六)へ。講師は元宝塚歌劇団・関西交響楽団の奏者麻生アイト氏 A級千二百円 B級八百円週二回



源頼義と義家

富士野鞍馬

源氏は、清和天皇の孫、経基を祖とし、経基の曾孫、頼義の時に、その勢力は拡大された。頼義は、京都朝廷にうまく仕えながら、源氏の軍閥拡張を図り、関東にその地盤を固めたのであった。永承六年（一〇五一）に、陸奥守兼鎮守府將軍に任命されて、その子義家と共に、天喜四年（一〇五六）から、康平五年（一〇六二）まで、陸奥の豪族、阿部頼時、貞任、宗任と戦って、それを亡した。この戦は、七年間であるが、「平家物語」にも、「日本外史」にも、九年戦ったとあり、「前九年の役」という。

源氏は、清和天皇の孫、経基を祖とし、経基の曾孫、頼義の時に、その勢力は拡大された。頼義は、京都朝廷にうまく仕えながら、源氏の軍閥拡張を図り、関東にその地盤を固めたのであった。永承六年（一〇五一）に、陸奥守兼鎮守府將軍に任命されて、その子義家と共に、天喜四年（一〇五六）から、康平五年（一〇六二）まで、陸奥の豪族、阿部頼時、貞任、宗任と戦って、それを亡した。この戦は、七年間であるが、「平家物語」にも、「日本外史」にも、九年戦ったとあり、「前九年の役」という。

衣川鎧もちろんこけおどし
（七一二六）
等と、連歌に洒落ている。また

京談とどさあで一首出来る也
（傍 五）
下の句は京談上はどさあなり
（タル十六）
京談が十四字とどさあ十七字
（万安 七）

「京談」は京言葉で義家であり、「どさあ」は東北弁で貞任を表して作られている。
貞任は、おそろしく大きな男だったようで、「日本外史」にも、「腰囲七尺、長コレニカナウ」と書かれてある。弟の宗任は降参して、京都へ連れ帰えられた。

そもそも、この前九年の役のキッカケは、永承七年（一〇五二）頼義が任期を了えて、京都へ帰途、阿栗川で泊った時、部下の藤原光貞の陣屋を、貞任が不意打したのに始る。それは光貞の娘に結婚を申し込んだが、承知されなかったもので、貞任は、その遺恨を晴そうとしたのであった。それで、

色事のもめから九年たき合
（万安 七）
前九年元は女房の出入なり
（拾 九）

はころびを都の人に見つけられ
（万安 八）
衣のたてははころびてはんじ物
（タル四一）
綻びを勇士の綴る衣川
（七一二六）

歌半首先もゆるむ衣川
（タル 八）
貞任は衣を楯に矢を防ぎ
（七一二八）

その時、義家は二十四歳。衣川の館を攻め、貞任の逃げるのを見て、弓に矢をつがえて「引返せ物言わん」といったところ、貞任は振向いたの

と、川柳に詠まれている。
いすれにしても九年間も戦争を続けたらどちらも疲れたにちがいない。

京談とどさあで九年いがみあ
（タル 二）
前九年年賦のやうに首をとり
（拾 五）
前九年具足のいしやうはつと
（タル二三）
なり
（拾 五）
これでもう二領着切ると前九年
（七一二四）
枕絵の裏打をする前九年
（拾 五）

と、鎧もくたびれただろうし、枕絵もやぶれただろうと、川柳はうがっている。
凱陣の時は奥州言葉也
（タル二三）
凱陣の時桃が生り袖がなり
（七一二五）
前九年万年草の値が上り
（七 六九）
前九年後家にせぬのがみやげ

康平六年（一〇六三）八月、頼義は、石清水八幡を、鎌倉に勧請して、鶴ヶ岡八幡社を建立して、戦功を祝福した。

頼義はふるまい水の元祖なり
（拾 五）
と詠まれ、承保二年（一〇七五）七十七歳で歿した。（日本外史には、承保二年八一〇八二ととなっている。）
承保三年（一〇八三）義家は、父頼義のあとをうけて、陸奥守兼鎮守府將軍となり、寛治元年（一〇八七）出羽の清原家の内輪喧嘩に介入して、遂に清原武衡、家衡を、金沢の柵に攻めた。これが「後三年の役」である。
義家が、雁行の乱れたのを

麻生 葎乃 著・米田三男之介装幀

葎乃 福壽草

句集

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

定価二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

振替口座大阪七五〇五〇番 電話住吉(四)六〇八二

見て伏兵ありと覺つたという
有名な話はこの時である。

諸事前の通りとふれる後三年
(タル 六)

雑兵はまた来ましたと後三年
(拾 五)

後三年とうくこすい方が勝
ち (タル 七)

等と詠まれ、またその時、
後三年目立つた手柄権五郎
(タル二三)

義家の臣、鎌倉権五郎景政
は、右の眼に矢があつたのを
を抜かずに、射た敵を探し求
めて、とうくその者を射殺
したという武勇談がある。そ
れを「目に立つ」と掛けてい
る。

目に立つ疵は鎌倉の権五郎
(タル二四)

一目のまけとりかへす権五郎
(〃 四六)

一目の負を景政取り返し
(〃 八三)

目に立つたはたらきをする権
五郎 (〃 四一)

権五郎さげぶりといふ目でね
らい (〃 五五)

権五郎目ざす敵は彌三郎
(〃 五八)

もうおれも玉に疵だと権五郎
(〃 六〇)

凱陣に景政一人顔かわり
(〃 六五)

権五郎うき絵のやうに城が見
え (拾 五)

て作られている。鎌倉長谷に
は、今も権五郎は祀られてい
る。

後三年には、弟の義光が加
勢に行ったのであつたが、そ
の川柳は見当らない。

前後十二年風景どこでなし
(タル三八)

前後十二年干戈をまじえたり
(〃 三五)

前九年と通算すると十二年に
なる。

頼義は又出直してたつき合ひ
(拾 五)

という句があるが、頼義は
後三年の役以前に死んでい
る。

寛治元年十一月に、ようや
く清原武衡、家衡を破つて、
東北地方は平定したのであつ
たが、朝廷では、私闘にすぎ
ないとして、何の褒賞もなか
つた。

その後白河法皇が、悪夢に
なやまれた時、義家は黒塗の
弓を献じて、御枕もとに立て
かけたなら、お惱がなかつた
という話がある。

義家はおどし頼政おかに射る
(タル二二)

それと、頼政のヌエ退治とを
列べて一句にしている。

こうして、義家は、八幡公
といわれ、武勇、戦略に優
れ、評判もよかつたが、官位
は、低く、正四位下右衛門尉
で、天仁元年(一一〇八)六
十八歳が最後であつた。

川雑婦人友の会 — 鏡野一の集い — 丸尾潮花氏を迎えて



写真説明
知真美居にて
前列向つて右より
高取周重、丸尾潮花氏、池上
さく(知真美居)
坂手有子、坂手年子、矢内眞
際子、岡田百合子、杉田明子
池上知真美、杉木たつ子さん等

若葉薫る五月一日、霞
乃先生の代理として、潮
花先生が来てくださいいま
した。

川雑婦人友の会の皆様
から絶大なる御声援を賜
わり、句会が盛大に催せ
ましたことは感激のほか
ございません。

楽しい記念撮影がすん
でから、川柳とは何かと
いうお話を潮花先生から
親しく聴かせていただき
き、路郎先生や霞乃先生
の句集から、数多い不朽
の名作が、潮花先生の名
調子に乗って会場は暫し
川柳のダイゴ味に陶酔い
たしました。会員からの
熱心な質問に対し、前夜
来からのお疲れもおいと
いなく、いちいち親切に
説明していただいたこと
はわれわれには大きな収
穫ございました。

すき鍋を囲んでの実生
活と結ぶ川柳のお話や、
賑やかな雑談がつづいた
あと、お得意の舞踊を見
せていただきました。

鏡野友の会有志によって「かが
み音頭」の手踊りを見ていただい
てここに舞踊交歓の一コマもなる
という和やかな場面もございまし
た。

再び句席にもどつて、友の会の
主旨の御説明があつて、今後の婦
人友の会のあり方について、いろ
いろ御指導を頂きました。待望の兼
題の披露に胸をはずませ夢のよう
な楽しい一日でございました。

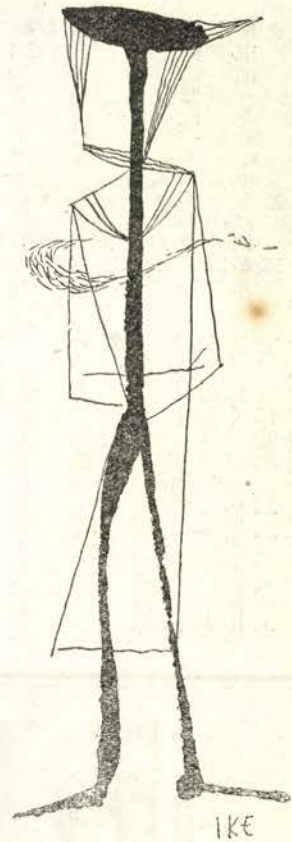
鏡野婦人友の会の今後の方針と
しましては、月一回は句会を開い
て、川柳による修養の心の身だし
なみを身につけて、情懷を豊かに
高めることを誓ひ合いました。

私の母を中心にしてこの会の発
展を図るよう潮花先生から御指示
をいただきました。この意義深い
友の会を各層の婦人へ呼びかけて
川雑本社の御努力や各地川雑婦人
友の会の御友情に応えるべく献身
する決意でございませす。

今やつと、小さな二つの葉が出
たばかりの芽ではございますが、
やがては枝を伸ばし、花を咲か
せ、幹を太らせるよろこびにあふ
れております。

来年の桜の花の咲く頃には、霞
乃先生や潮花先生をお迎えして、
岡山鏡野婦人友の会一年の生長を
見ていただくことを今から楽しみに
いたしておきます。(知真美記)

川柳雑誌特製
投句用柳箋
一冊(五〇枚綴)三〇円
送料 八円



IKE

秋春筆雜

ニコヨンの歌

長野文庫

今治市の繁華街は本町一、二丁目と常盤町一、二丁目だが、その町筋であり将来は二丁目に次ぐ商店街として発展する公算が大きいので三丁目の住民はそれを期待し夢のような希望を持って居たのである。併しそこには一つ障害があった。それは三丁目の中心部に凡そ二千坪に及ぶ空地があり、その空地は松山地方事務局の所有になって居て今治地区の裁判所が建築されることになって居たのであるが、若しも裁判所などが建てば商店街としての繁栄の障害になるので、種々陳情やら請願等をして土地の一部払下げ運動や裁判所の移転運動などを各方面に働きかけて居たのである。一方事務局関係者や弁護士などは速かに裁判所の建築をやって貰いたいと要望し

中央要路に運動したので流石の中央の裁判官も一体どうしたらよいか暫し去就に迷い判決を下すのに苦心したらしいが、昨年の年末に初期の予定通り裁判所建築を法定して附近住民をがっかりさせた。

一寸斯うした即製音頭を次から次に繰り出して楽しげに仕事をし居るが全く即興詩人である。かつて朝日新聞の天声人語欄に女房の産よりアブレ氣にかゝり

能弁に押しまくられる民の声わがことになれば火を吐く弁となり
そして早速建築に着手して現在始んど完成に近づいて居るが、最近この建物附近の下水道工事を市が改修して居る。そして沢山の労働者が棒杭打込み作業をやっているが、それ等の労働者の音頭が実に面白い。

近所の人らよ

裁判所が出来て嬉しかる
夫婦喧嘩をさばいてくれる。

色が黒ても
心配するなよ娘さん

黒でも白にするのはこゝだよ
ヨイトマケく

寝坊して安定所まで新記録など一連のニコヨンの川柳を見たが、これ等の連中に川柳を作らせたらさぞ面白い句が出来ることだろう。

本当の語本当に笑わせる。目鼻だち揃って居るが白痴の美

變人会

木山 遠二

終戦によって俄百姓となった者ども六名を以て会をつくった。昭和二十年十二月の事である。毎月第一土曜の夜を例会日とし会場は會員の家を輪番で使ふ事、食い気

でも色気でも何でもよろし腹藏なく自由に語り合ふ事、第一土曜日の集りだから一土会と名づける事ざっとこんな具合で発足した。ところが部落の一部の人達の間ではいつの程にかこの会を變人会と称ぶようになつた。何が故に變人会なのか、吾々には合点が行かないのである。

毎月の例会史では物足りないので部落の溜池のほとりでキャンプをして見たり、自転車を買って近郷近在の有名地或は有名人を訪ねたり、僧侶とか弁護士とか、文士、茶の宗匠、画家、書家、骨董屋、物の蒐集家、等々俄百姓の六名にはあまり縁の無い様なところを招いては座談会を催したり一夜講習を開いたり、こうした会の行き方が變人会の名を生んだのではあるまいか、それとも變人どもが顔を揃えた会と云う意味なのか、會員各自について考えて見る。

会の始まり頃は全會員全列に肩書の無い俄百姓だったのが現在では、日本画家の白港はK市N地区の公民館長、川柳人の甘柿はK市N地区の支所長、歌人の牛轡は当地区から数里東のK市教育長、茶人の智以郎はM保険会社の何とか長、先ずこの四名ほどの角度から見ても變人とは云えぬ円満なる人格者である。残る水雷と遠人にしては至極平凡なお百姓で變人とは受取れない筈だが、この二人には

唯一度こうした事があつた。と云うのは農地改革で土地の確保と云う事にお百姓中みんな目の色を変えていた最中、水雷が畑一枚を無償で遠人に呉れてやり、遠人はすまんねと云つた丈でケロリとしていた事である。水雷としては引揚者の遠人に対し世間並を超えて同情をした訳であり、遠人としては厚意に対する感激をグツと腹で押さえて表へ出さなかつた云う訳だが、兎に角この一件はどちらも人並の行き方をしなかつた様だ。ではこの二人の為に變人会の名が生じたか？と氣を廻してもそれは当らない。何故ならば此兩人は一土会を代表する様な存在ではなく、会の隅っこに縮まっているんだから買被つてはいけない。結局變人会の縛名の起因は吾々にはわからぬ儘となつて居る。

話は別だが今から三十数年前当地区内に阿部吟社と称し十数名の會員より成る川柳社があつた。大正十二年迄続いたが、この会に名を連れた六名の若者が図らずも、現在の一土会の六名なのである。奇しき因縁と云うべきではあるまいか。わが一土会は川柳会ではない。然し一土会は川柳を母として生れ出たものと私は思っている。三十数年前既に阿部吟社と云う母胎にあつて、胎動をはじめつゝあつたものと思うのである。尙又昨年三月から、遠人、甘柿其他同志

によって川柳並木会と云うのを生
んでゐる。之は川柳阿部吟社の孫
と云えるであらう。

何はともあれ変人会の愛称?を
頂戴してから既に十二年目を迎え
たが会も会員も益々健在である。

去る四月十五日の花の盛りには花
に反いて全会員自転車連れ三十
軒を離れた地に泣童詩碑を訪ね
た。人或は「花に反く之れ変人の
所以なり」と説くかも知れない
が、会員の意気は以て知るべきで
あらう。とは云えもう還曆うちそ
との年配の者ばかり故、いずれは
一人減り二人減り、運のうてなに
迎えられ行く事であらうが最後の
二人となるまで会は続くであら
う。然し其後三名の新会員を迎え
た事を思えば「新陳代謝が行わる
ものとするならば、或は此会は
永久に続くかも知れない。そして
変人会の名を返上する時が来るか
も知れぬ。

新会員を御披露に及べば

- 英語教師 杉 風
- 音楽教師 草無園
- 歌人 万 秋

二つのこと

澁江博遊

その一

二月号誌上に、酒井ひか平氏が
「声」という題で一文を書かれて
いました。打てば答える作者の名
乗りについては全く同感。それに

加えて私は更に、選者である披讀
者にも、ふんいきを盛り上げる努
力をお願いしたいと思ひます。五
人、十人ならいざ知らず、五十人
以上の句会に於いて、小さい声で
ほそほと披露するのはどうかと思
ひます。第一後方は聞こえやなし
いのです。選者は、選び選ばれた
人、もつと堂々と大声で披露して
頂きたいと思ひます。大声の出な
い人は句会に限り、選者を遠慮す
べきであるし、又選者に指定すべ
きでないと考えます。

その二

これは私の夢かも知れませんが。
川柳の総合誌が発刊されないかと
いう期待であります。川柳雑誌、
番傘を頂天として、多くの柳誌は
ありますが、総合誌がないのはど
ういうことでしょうか。ここらに
川柳発展の鍵があるのではないで
しょうか。テンポの速い社会に迎
合するわけではありませんが、出
来れば週刊、悪くても旬刊も
で、募集柳壇の佳吟には賞金をふ
んばつする。句会は毎月一回、こ
れにも賞金をふんばつするとい
うような総合誌が出来てもいいの
はないでしょうか。番傘あたりは
賞を嫌うと思ひますが、賞を出し
て悪いと思ひません。賞を嫌う
のは「道楽」と思っているからで
しょう。「向上」「努力」に励む
のは大いに良いと考えます。柳誌
の経営は困難らしい、だが読者が
多ければ成り立つものと確信いた

しますが……。老人は老人組、ど
なたか気鋭の士はやりませんか。
私自身は機会を得たらやりたいも
のと念願しています。その節、麻
生先生、岸本先生等に玉稿を頂き
に行くと考えただけでも楽しいこ
とです。柳歴二十年、ただし昭和
三十一年度からようやく川柳え力
を入れる決心をした私が、あつか
ましくも思つたまま柳界展望の一
端を書きました。雑言お許し下さ
い。(終)

受け賣り

ばなし (2)

不二田一三夫

ロツク・アウト

労組のストに対し、経営者が一時
事業所を閉鎖して対抗手段をと
り始めた。革新勢力がこれに参
るとは思えぬが、さきごろの炭労スト
によって今後の闘争の成行が注目
されてゐる。

夜おそく帰つた夫君が、戸をト
ントン叩きながら、

「訳を話すからとにかく開けてく
れよ、君の土産も持って帰ってき
たのだぜ」とか、なんとか仰言
つて、奥様からロツク・アウトを食
っている風景はトモモヤないが
川柳的ではないか。

台禅慧光照真居士

この戒名は誰か?こんなクイズが

出る時があるかも知れない。これ
は帝銀事件のテンペラ画家平沢貞
通被告の戒名なのである。
いままな無罪を叫びながらもこ
んな戒名までこしらえていているの
だ。死刑廃止の英国を彼はどんな
眼で見ているだろうか。
百五十枚に近い絵を描きあげた
そうだが、製作をしている時は生
死を超越して絵筆を握っているの
だらう。遺言をのこすような気持
で描き続けていることだらうが、
われわれ川柳家も一句一句を遺言
書く気持で句箋にむかえば「いの
ちある句」が生れるかも知れな
い。

ソ連版M+W

むつつりとしたノー・コメントの
国ソ連の男性といえは武骨一辺倒
のように思っていたが、なかなか
どうして日本男児のパーマ以上の
女性化がモスクワの街をのしてい
るらしい。口紅をつけた男性なん
て日本ではオカマ氏ぐらいのもの
だらうが、アチラではもうとつく
に実現済みだとのことである。六
尺豊かの大男が口紅をつけてシヤ
ナリノと歩く図はどんなもので
あらうか。抑留者のなかには川柳
をやっていた人もあるだらう。川
柳の眼鏡でちよいと覗いてみたい
ものである。

長生き

ソ連のアルメニア共和国(人口二
十方)に百才以上の高齢者が三百

四十名、九十才以上が二千六百名
もいるそうである。だがその隣り
のゲオルギー共和国には百五十五
才というソ連最高齢者がおり、そ
のイゴール・コロレフという老人
の奥さんのタマーラという人は百
十五才とのことである。こんな国
では葬式屋は直ぐ破産してしま
うだらう。
本社の句会で「長生き」という
題が出たとき

長生きも程度があるよと邪魔
にされ

という拙句が抜けた。隣りに
いた十哲さんから
「あなたは親不孝やなア」と云わ
れて、

「しまった」と思った。語るに落
ちたのである。親父どのよ、わる
く思うな。

お酒の前後に

メルチ木B12

二日酔い 悪酔い
肝臓疾患

武田薬品

25錠 55錠 100錠



一路集

帯

増田耕民選

狐拳帯を解かせてから本気 良坊
 尺八の袋になつた祖母の帯 古意知
 結べない帯で解かずに無事帰り 貴美
 父さんの帯を足場に肩車 幸児
 見栄もあつた帯をゆるめる母性愛 日本村
 湯上りの帯汗を拭き汗を拭き 雅人
 伊達巻へ湯の香も匂う春の宿 どんたく
 帯を解く音聞いている家族風呂 天邪鬼
 満員車から放り出されて帯をなで 初甫
 帯を解く覚悟の出来た眼を落し 知恵美
 角帯の専務奥からもみ手で出 定男
 観劇へ亭主の知らぬ帯の敷 与呂志
 帯ポンとたいて晴着立ち上り 越山
 洋装にないしとやかさ帯に見せ 豊年
 お太鼓に結んで女の線になり 藤波
 帯解いて化粧落して母になり 義夫

帯の柄別れた妻を想ひ出し 昭三
 帯締める丈けに妹泊りに来 むじな
 帯を解く妻の媚態を見迷がさず 可十
 会のこと帯丈け解いて語る妻 晃康
 貫祿が出来兵児帯の締め具合 与根一
 本妻の買えぬ帯でも二号締め 錦花
 永遠に処女に別れる帯を解き 箔川
 雨へ耳立て、晴着の帯を解き 代任男
 消してから帯は煽情的に解き 芳仙
 帯解けば疲れ忘れた里帰り 雄々
 新調の帯丈けたみ寝る女給 扇子仙
 きつちりと締めた帯女隙見せず 夜潮
 宿の帯手垢で光る程儘け 三六
 座蒲団を帯で背負うた酒の席 万古
 亡き妻の帯が娘によく似合い 文平
 胎動が帯の固いと云う小言 龜庵
 此の帯の思い出主人未だ知らず 峰豊
 お祝儀は帯にはさき猪口を受け 古心
 一番前の帯して妻素直 三思楼
 洋装のこの娘も帯がほしくなり 秀三
 腹八分過ぎて帯解く食い盛り 有子
 お花見はどれで行こうと帯並べ 柳叟
 帯せねば頼りないと母律義 雄声
 胸高に結んで処女と云う誇り 牧人
 欠伸して寝巻の細帯ゆるく締め 葉光
 味気なく女世帯の帯を解き 水堂
 帯で出る娘等を見送る桜草 香林
 妻の座を守る決意の帯をしめ 涼一
 細柄に帯もばりつといふ姿 祥月
 帯とけばなかつた食落落ちてくる 木魚
 税務署へ掛け合に行く帯をしめ 正郎
 (佳)帯結ぶたびにあなたは手をかれ 千容

(佳)すき焼の中座は帯をゆるめて来 恒雄
 (佳)姑の目が細帯の縁を追い 隆文
 (佳)戸を敲く客へすこきを締め直し 英断
 (佳)大学を出て角帯の店を継ぎ 万古人
 (佳)母のない娘が帯をあきらめる 十九平
 (佳)兵児帯に未だ養生の日を重ね トン坊
 (佳)満ち足りた顔で女は帯をしめ 多久志
 (佳)帯結ぶ時間も見込み朝を起き 勝三
 (佳)思案の手帯にあずけたまゝでおり 一也
 (佳)世の流れ帯も結べぬ娘に育ち 五茶
 (人)闘病のかほそき腕に帯長し 不二
 (地)蝶結び母は立つて見座つて見 惠二郎
 (天)兵児帯で居れば子供にとりまれ 高志
 (軸)姉の帯妹の式にもまに合せ

ニユー・ス

浜田久米雄選

さつそうニユー・スの人が裏から出 良坊
 本人に聞けば程でないニユー・ス 康一
 失言のニユー・スは耳にたこ出来 豊年
 弁当の包で思ひ出すニユー・ス 英断
 花名刺ニユー・スにされるご存知らず 与呂志
 又聞きのニユー・スヒントがほけかしり 惠二郎
 投資しているからニユー・ス気にかゝり 幸児
 臨時ニユー・スアナ哀愁の急調子 千容
 ニユー・スだけ聞いてラジオは子に譲り 藤波
 強盗のニユー・スを留守居舞う聞き 実男
 政界のニユー・ス欠伸の拾い読み 与根一
 ひまで居てニユー・ス係とあだ名され とも子
 子のニユー・ス二十日にわら生みつづけ 義夫
 エンブルフルニユー・スも派手になり 五茶

ニユー・スとは違う故国の土を踏み 万古人
 しよらないニユー・スごも角社へ帰り 白猫児
 記者の眼の色が変わつた電話口 高志
 初耳のように御大ニユー・ス聞く 微醉
 今聞いたニユー・スをしやべる知つたふり 三六
 ニユー・スにもならず平和な村で暮れ 春雄
 十大ニユー・スども聞きたくないニユー・ス 素飄
 ニユー・スにもならぬニユー・スを書いて生き 十九一
 時間合せるだけに聞くニユー・ス 不二郎
 後家さんのニユー・ス井戸端長くなり 龜庵
 ニユー・スになるから記者やつて来る 笑太
 先生が生徒の方から聞くニユー・ス 十九平
 さつそう手して良いニユー・スおまへんか 牧人
 小使が変なニユー・スを知らせに來 涼一
 あらかじめラジオで知っているニユー・ス トン坊
 ニユー・ス聞いたご悪友がたかつて來 香林
 外出の度にニユー・スを仕込んで來 一也
 旅客機でニユー・スを撒きに男來る 葉光
 美人秘書とかくニユー・ス多すぎる 草柳
 人事課のニユー・スもれる異動時期 木魚
 すはらしいニユー・スへ女活気づき 夜潮
 わが胸に納め切れないニユー・ス 水堂
 新薬のニユー・ス病院中に知れ 勝三
 (佳)ハガキでもよしふるさとのニユー・ス読む 不二
 (佳)銭湯のニユー・ス三助まで聞こえ 初甫
 (佳)ニユー・スカリまだ当落の線でなし 正郎
 (佳)ニユー・スにはせぬ約束の紙包 柳叟
 (佳)怒つてもどうもしよらないニユー・ス 日本村
 (人)日本の遅れをニユー・ス映画で見 万古
 (地)皇太子ニユー・ス映画で存じ上げ 有子
 (天)ニユー・ス地球が回るから生れ 雄々
 (軸)あつてはニユー・スさうしどもりかけ

いのちある句を創れ



投稿規定

用紙は原稿用紙、文字は正
確、締切毎月二〇日、投稿先
本社宛

四月本社句會 (大阪市)

四月七日

午後六時

於 光明寺

毎月七日と定められた本社四月例会は

奇しくも土曜日に当り、陽春を迎え相変

らず賑やかな裡に開かれた。今月は川村

好郎氏に始めて柳話をお願いした。度々

上京される氏は、車中の一婦人を救つた

エピソードを面白くまとめ、言葉の使い

方も、時と場所によつて違うことを力説

され、弓削にて話された路郎師の講話を

引用して、文字の使い方、表し方が如何

に大切であるかを話された。披露に移つ

ては名句の満開、佳句咲き競うなかに不

朽洞賞杯は川村好郎氏の頭上に輝いた。

出席者 路郎・凡茶・南風郎・水

客・紫香・いさむ・喜好・梅志・浪花・

十悟・多久志・雅堂・茶仏・一ノ十・蜷

氣楼・香林・玄武洞・文秋・省三・好

郎・水堂・峰春・愛論・みのる(餅)・颯

太・賀峰・利武・游馬・村雲・浩・立

児・夢人・山茶花・水茶・秀夫・一瓢・

蝶・みのる(鳥)・洛風・進之助・白柳
子・三司・凡九郎・淡舟・栗・貴山・黄
蛾・涼一・昌子・霞乃 (摩)

兼題「花見」 麻生路郎選

お隣りの桜見せとく子沢山 好郎

気象台明日の花見にけちをつけ 喜好

花一句出そうなとこへまが酌がれ 梅志

悪酔いの介抱だけをした花見 一瓢

船狗う策へ一陣花吹雪 村雲

年度末ようやく落んだ花見酒 季贊

花吹雪乙女は感傷的になり 愛論

つき合いで行くに花見をうらやまれ 山茶花

お花見の帰り夫婦が探めつけ 与呂志

花の下社長のおそをおがんで来 公男

花見から疲れ帰る義理の仲 水堂

平社員花見に来て使われる 洛風

お花見の弁当子が持ち母が持ち 知恵美

花見から帰った脚は投げ出され 茶仏

落第がやれ花見だの野球だの 賀峰

夜桜に妓のすその開きよう 昌子

人並に花見がしたく耐を提げ 香林

どら声の唄にも桜散りかゝり 同

遅かった桜気にせすいける口 南風郎

花時の臨時電車で掏られて来 一乃字

孫連れて人混みさせた三分咲き 三司

花を見てそれから羽田発つ二世 飄太

陶然となった花見で子を忘れ 白柳子

花の下三味は三つにたゝまれる 三司

御近所ですます花見は犬をつれ 紫香

桜なら堺刑務所今見頃 好郎

町内の花見二級酒運ばれる 路郎

兼題「運転手」 西尾 榮選

アベックへアベックミラーが邪魔になり 省三

生来の無口が抱え運転手 立児

運転手ねむりで困る春の風 季贊

運転手もうケープルは花盛り 知恵美

運チャン機転交番へバスが着き 省三

運転手の不安行先また変り 凡九郎

運転手が散り込むとこで待ち 水客

運転手に警戒されるほど若し 同

絶景どころがバスの運転手 好郎

遮断機へ一服つけた運転手 省三

積めるだけ積ませ運転手のタバコ 梅志

首しめた奴もやっぱり運転手 多久志

客もほし命もほししい運転手 進之助

運転手今日も新開種になり みのる

社長また二号変えたなと運転手 好郎

運転手お符もはって花を活性 有子

伝説の岬ゆっくり運転手 一乃字

運転手浮世の嘘に馴れた背 水客

自家用は運転手までひげをつけ 昌子

運転手恐怖の夜霧馳けぬける 潮花

運転手にスコアの続き教えられ 栗

兼題「映画」 友淵貴山選

西部劇男勝りにさそわれる 南風郎

アベックが映画へはいるにわか雨 季贊

試写会を出て掘端の風を吸い 賀峰

母親に似たか映画へ泣きもせず 与呂志

コーヒーへ今観た映画の筋を追い 愛論

映画なら行くわと女ついて来る 淡舟

封切がおかし場末の映画館 十悟

早朝の映画へ軽るい財布もち 梅志

映画みて映画の様な恋をする 蜷氣楼

真剣に母は泣いてた母映画 一瓢

時間待ち等と映画も落ちぶれる 凡茶

映画より花見がよいぞ春の風 秀夫

ラブシーン映画なりやこまもに見 阿茶

スクリーンの恋不潔に見る十九 潮花

侍せな恋が映画にすい込まれ 水客

映画では悲しい恋のまゝで済み 香林

キッスシーン彼女も握り返して来 立児

安っぽい涙で映画儲ける気 凡九郎

講堂の映画拍手でせきたてる 凡茶

キッスシーン隣りのおきび目をつむり 喜好

シネマスコープ最前列は一年生 昌子

母ものが好きです現在未亡人 飄太

お茶飲めば映画の話になる若さ 紫香

洋画しか観ませんねんと西部劇 夢人

星明り映画の通り子と歩く 水客

ニユース館旅のカバンもつて入り 飄太

見せられぬ映画子供は知っている 昌子

映画ではこうと息子は逆う気 香林

美しき不貞映画のなかの恋 潮花

忍術の映画へ親子して出かけ 貴山

庶題「洋館」 正本水客選

洋館は目印だけの役目もし 花香

ピアノ鳴る洋館の横を抜け 紫香

パンガローちよつ洋館らしく建て 文秋

洋館の呼び鈴を押す御用聞き いさむ

洋館に住んで畳がほしうなり 潮花

岡越えたとこの洋館夕焼ける 紫香

洋館の主人の顔はまだ知らず 文蝶

洋館の方へ代表坐り込み 南風郎

洋館の方は儲ける診察場 進之助

洋館の裏は帯がブラ下り 貴山

洋館の前にポツンと乳母車 同

洋館の裏は帯がブラ下り 同

洋館の前にポツンと乳母車 愛論

洋館に釣るところがない御提灯 白柳子
洋館が人手に渡る判を押し 茶 仏
洋館の闇にも黒く威圧され 立 児
洋館が並び冷めたい春の風 文 蝶
洋館の窓が光っている社宅 山茶花
窓に花置いて洋館春になり 水 客

席題「欠伸」 若本多久志選

我が家と云う気安さの大欠伸 南風郎
お隣りの美人に欠伸うつされる 雄 声
不屈な欠伸を課長見逃さず 雅 堂
家計簿へ小さい欠伸かみ殺し 梅 志
退屈な午後寝不足でない欠伸 凡 茶
大物の欠伸をカメラ見逃さず 雅 堂
赤ん坊の欠伸妻を呼び母を呼び 水 客
詭経する僧の背中で欠伸する 飄 太
生欠伸殺せば私が嫌いな 同
欠伸うっせお通夜一人減り二人減り 南風郎
欠伸したとたんに気付く忘れ物 山茶花
欠伸しただけで新婚ひやかされ みる
頼杖の欠伸に午後の受話機持つ 玄武洞
生欠伸昨夢の酒がまだ残り 茶 仏
朝からの欠伸昨夜の自由する 凡 茶
破談覚悟で大きな欠伸して帰る 潮 花
欠伸した序に雨戸閉めに立ち 水 客
せめてもの抗議欠伸を小さくし 同
前相撲初釜で来たと言う欠伸 凡 茶
もうやめて欲しい話へ欠伸する 水 堂
春うらら猫も女も欠伸する 潮 花
くどかれて女給欠伸で聞きながし 狂 二
欠伸して見せお先へ寝みませ 立 児
欠伸から夜の長さへ話しかけ 文 蝶
欠伸していて姑はねにゆかず 葉 人
猫の欠伸昨夜の恋を忘れてる 夢 人
初孫がもうくさめる欠伸する 梅 志

独り者部屋一ばいの欠伸をし 狂 二

席題「啖呵」 伊藤茶佛選

威勢よく啖呵をきつてクビになり 多久志
税務署で啖呵だん／＼小さくなり 文 蝶
全権は啖呵も切れず引き下がり 浩
啖呵切るとこへ晩飯呼びに来る 貴 山
親分が言うたと啖呵切りに来る 一乃宇
決裂を急いだ訳でない啖呵 文 秋
はつきり借さぬと知つたい啖呵 紫 香
味方にも聞かせて啖呵威勢よし 凡 茶
電話口啖呵を切れば違うてい 省 三
内でもなら言える啖呵を隅に居る 凡 茶
つんぼとも知らず切っている啖呵 賀 峰
弱点をついて啖呵切れのいゝ啖呵 いさむ
ボク／＼と啖呵も切れてまだ嫁かす 凡九郎
とるつもり税吏啖呵を聞いてやり 省 三
パン／＼に啖呵真向から切られ 一 飄
すぐ負ける啖呵は後へ押しやられ 凡 茶
大声で啖呵を切った主居らず 静 馬
啖呵も切らず帰ったを馬鹿にされ 文 秋
おぼえとれ以外の啖呵知らぬなり 山茶花
練習の積んだ啖呵で顔を売り 賀 峰
私服とは私らず啖呵の派手なこ 雅 堂
のめ／＼と女に啖呵切られたり 一ノ十
胸のすく啖呵は切れぬ京ことば 村 雲
啖呵切つた男の眉がつり上り 涼 一
啖呵切つたつてさ／＼笑い／＼云い 潮 花
いつち先きに啖呵を聞いたのがされ 喜 好
投げける啖呵六代目の呼吸 立 児
もう去んだ後で啖呵の幽切れよき 貴 山
飲み過ぎた啖呵は軽うあしはれ 雅 堂
啖呵きる大阪弁はスカミたい 多久志
ちんびらがどえいゝ啖呵切りよった 一乃宇
ノイローゼ気味の啖呵妻は知り 梅 志

利き腕をとられ啖呵の腰が折れ 村 雲
啖呵切ると口調父子は争えず 茶 仏

川 淀川支部句会 (大阪市)

武部香林選

入学式子供の返事母がする 由 幸
入学の祝辞は判を押したよう 文 児
角帽を險に尊き母の汗 六竜子
家出した母入学の噂聞く 清 生
あと四年すねかじらる覚悟なり 巨 人
見栄捨てるのへ縁者の小うるさく 水 茶
顔の利く見栄が今夜もおごられ 山茶花
母親の見栄が始まる幼稚園 若 菜
横丁で景気の裏をのぞいて来 礼 司
横丁で噴まれた靴を履き直し 花 村
恋情が横丁まで来て引き返し 旭 蝶
へそくりは踏台のいるころへ入れ 多久志
踏台で逆立ちをする次男坊 東洋男
踏台の夫へ無理な注文し 水 堂

川 阿倍野支部句会

三月句会

菊沢小松園選

経験を積んで叱らぬ父となり 賀 峰
即席の芸とは女房見て呉れず 恒 明
棟炭の穴を数えて居る子供 豆 秋
定紋の風呂敷が要る忙しき 白柳子
風呂敷を拵けた丈で包みかね 葉 光
控え目という未亡人の無地好み 梅 里
穴あれば這入る表彰されちまい 文 秋
螺子を巻く音へ叱つた事を悔い 梅 志
女世帯螺子のゆるんだ儘つかい 小松園

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

田垣方大選

四月八日 南中学校

やがて散る命と知らず花蕾 善 坊
春眠へ妻はラジオを大きくし 隆 文
まだ蕾母校で人の子を教え 晴 雲
未亡人意地で育てた子が背き 飴 坊
税吏とは知らず儲けのほろを吹き 狂 風
就職へ祈りたいよな通知が来 夷 礎
お相手が変わり趣味も又変り 万 坊
相手が相手だから相槌打って置き 可 笑
目醒しもうつ／＼で聞いた春の床 天 風
背かねばよかつた気まずい膳につき 斜 木
春眠が姑に朝戸だし抜かれ 承 平
三面を春に背いた記事で埋め 鯉 風
ごみ箱の様に明日から蓄めたるか 三 六
ごみ箱へしよう突をした三輪車 耕 水
諦めた頃採用の通知が来 素 身 郎
親切に背いて冷たい雨にあい 流 風
相手からも無視されたまゝ恙がなし 彌 次 郎
蕾でも花でも葉でもだしに呑み 眺 松
お祈の時は善人らしくなり 明 心
相手なき夕餉に花の匂いだけ 愁 水
お隣りは祈ってくれる母があり まり子
諦めてよかつた人の真意知り 清 子
倅を祈つて嫁つた娘が戻り 風の子
虫のよい祈りに神もあきれてい 麗 水
春眠あかつきをおぼえすまた遅刻 十九一
背れた時は公金まで嚙り 一 念
御期待に背き代議士金を蓄め 五 茶
ゴミ箱で家の生活を見てとられ 春 日
本心に背いて暮らす厚化粧 万 古
日曜日今日春眠をむさぼらん 千 容

川 米子支部句会 (米子市)

三嶋美笑選

催促に行つて同情して帰り 無開
 浮氣して帰れば妻の素直な瞳 水鏡
 配達のベタル風向の順にする 新雪
 浮氣する噂は奥さんの方らしい 吾柳
 本当の浮氣を四十からおぼえ 美笑
 催促をされて分つた親の借 素生
 大漁と風で見抜いた漁師の眼 庄太
 浮氣などもうこりこりの手鍋揚げ 素飄
 催促を猫撫で声で断られ 久城
 貸しといひ催促出来ぬ程内氣 詩郎
 頭痛でも医者は乳房を見てしまひ 飄太
 花名刺良妻そつと燃やしとき 愚球
 催促に行けば先輩頭が低い 蛙眠子
 春風に昭和の女慌てない 天邪鬼
 云い悪いさまで頭痛にして逃げる 康女
 指切りをもう忘れてか浮氣する すみ子
 浮氣する心の隅に妻もいる ますほ
 浮氣するパーマ二三日前かけ なぎさ
 催促をするまでほつとくことす。 君技
 無理もない頭痛と母の優しい目 風車
 出張と云う名で秘書と湯の旅館 菊女
 浮氣などさせたくはなし靴磨く 雄々
 あの顔で浮氣するとは憎らしい 節技
 ザーマスと氣取つた妻へ浮氣もれ 極光
 悔恨を抱いて浮氣の三時間 佐智子
 無事帰りの浮氣を派手に云う みちを
 新婚の頭痛欠勤続く春 紅帆

川 備前支部句会 (岡山県)

浜田久米雄選

棟梁の変骨弟子がよく変り 操
 節一つにも棟梁は氣を使い 柳風子
 棟梁の家の柱は虫が喰ひ 綾女
 棟梁の格に似合ふに家をたて 三六

念仏はあゝの世へとどく声であげ 秋月
 お彼岸の声となつてお念仏 久米雄
 念仏へ死んだ我が子の顔が浮き 伊久野
 念仏へ忘れ形見が来て笑ひ 正州
 もろて来た形見の着物虫が喰ひ 圭女
 曲尺も形見となつたままに錆び 東岸子
 榮転の度に道具に疵がつき 娘句楽
 榮転へ庭の桜が咲き始め 幸仙

川 出雲支部句会 (出雲市)

尼緑之助選

花便り今日長男の初登校 美好
 売りに出た家とは満開の花知らず 雲平
 情熱に一瞬ゆれた月見草 李朋
 耐呑んでひとりぼつちの花を見ん 天痴人
 職探す足もいつしか花へ向き 代仕男
 アベツクの肩へちらほら花吹雪 やすを
 アベツクを丸くつゝんだ双眼鏡 白菊
 アベツクへ子供のマリがはねかえり 吐
 アベツクに輪に似合わぬのがついで 木ん馬
 柔道も出来る貴方と夜の道 つとむ
 客の視線浴びてアベツクを降り 柳作
 吼え立てる犬にアベツクを合ひ まさ子
 アベツクが来たぞ〜と幼稚園 まき子
 春らんまん口説けば花の酒へ逃げ 披青
 花の山子らは恙なく疲れ 白鷗
 花・花・花・俺は背広も金もない 出雲
 花ひらく山が驚く労働歌 岬月
 若き日を語り消えぬ人を恋ひ 緑之助

川 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花選

見られてるとは知らぬ夜の窓 青水
 一大事むこに娘がついて出た 笹舟

丹精の花まゝごとの贈にのり 仏道
 野にあれば蝶と遊ぶに床の花 哲二
 草刈りの鎌がためらう花の色 六花
 草花を押しして故郷の便り来る 綿花
 二人なら歌あり詩あり野辺の花 実男
 此れ程に尽して通じぬなきぬ仲 雪峰
 パチンコでやられ電車に乗り遅れ 呆鴨
 病床へ窓から春の陽ざしいれ 仙柳堂
 アパートの窓々々の子沢山 天作
 七転び八起きしたに焼け出され 風柳
 知らぬ娘の写真にくやしい声さなり 綿花
 人混みにスリとポリスに間違ひ 豊年

川 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

四十の長男へ祖母念をおし 良子
 長男かいと云われ心のさやにぎり 三粹
 長男であつたばかりに鍼をもち 志峰
 長男はつまらぬもの愚痴を云い 柳常
 履歴書は要らぬ親父の職をつぎ 秋峰
 引伸すように長男育てられ 洋牛
 希望の芽つまれ長男家を継ぎ 越山
 講義録長男なりの夢を持ち 白猫児
 長男であるから頼りなく思ひ 英断
 嘘の世へ出る長男へ云いきかせ 無聖
 長男の因果は借金迄貰ひ 無鬼
 娘心も借衣裳見抜いて居 一両
 早合点されたを娘泣くばかり 文平
 失恋から素直になつた娘の心 偶倍
 舞台から娘心をそそのかし ひか平
 チョップチップの娘心へ迷う父母 尋四
 こわいけど誘惑されたい娘の気持 楡多可
 珍客も話をすれば借りる事 喜天
 珍客へ話題は妻の方が持ち 左文字

川 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山報

街角で按摩上手に立ち止り 美舟
 街角をアベツク柳の方へ折れ 東岸子
 思い出の柳が枯れた街の角 喜楽
 気前よく買つて借金して帰り 只世
 生計調査借金の額派手に書き 葵邸
 通勤のコース借金から変り 承平

珍客に江戸弁もちと交つてい 村雨
 珍客というにもてなす花もなく 小菊
 珍客のなまり早や子がまねて 枝葉
 珍客へ子供の方が落付かず 淳子
 珍客が見えて裏から子は追われ 凡志
 珍客がてんやわんやの種を蒔き 曉城
 いいところへ来たよ珍客もはやし 文子
 珍客の夕餉の膳が定まらず 初穂
 珍客が来たに蕾と雨ばかり 失名
 珍客は雑魚寝がいいさと泊るし 一風

品質優良
先カワペン
 TACHIKAWA PEN
 大坂市東区豊後町四八
 立川商事株式会社



ペン 筆
 ヴィン 画
 ゼム 筆
 カワ 画
 カワ 筆
 タチ 筆
 タチ 筆
 タチ 筆

長つ尻新妻拗ねたよりに立ち 薄仙
新妻の生けた野菊を褒めてやり 湖月
挨拶に出る新妻へ口をそえ 不老
新妻のまま復員待ちつづけ 鉄吉
本当の愛が夫を取り戻し 千年
父さんの浮気家中知っており 賤女
言訳が出来て浮気へ足を向け 笑雷
旅先でする浮気なら知れており 七面山

川下 下關支部句会 (下関市)

石川侃流洞選

初旅へむすび大きくつくられる 吞喜坊
春の陽へはしやいで女の健康美 戌理智
裏門をあけて二号の用は足り 茂美
更生のチャンスへ悪友つきまじ 九呂平
握り飯だけは日本の味で出し 芳人の
春雨へちらりと裾をのぞかせる 鳥石
相乗りをして重役に気を使い 良坊
出不精の妻からブランの出る陽気 藤四郎
安下駄の鼻緒染つた春の雨 千里
榮転の荷へあき箱が買ひ足され ほんみ
舞扇春らんまんの手が揃い 吐泉
合格のチャンス捉えて子はせびり 成夫
裏門へ廻れば世帯のアラが見え 一規
初奉公裏門抜けて泣きに出る 蘇人
躍動する肢体へ春の風が舞い 光堂
共稼ぎ相乗りで来る停留所 司楼
あき箱を重ねて開店景気つけ みつる
異動期へあき箱大事にしまわれる 伊三男
フアンションショー春の溜息へ呼びかける 十字星
相乗りへ私服やさしく声をかけ 柳慶
春雨へ伴せそらな芽がのぞき 侃流洞
握り飯母子で分ける夜の汽車 竹涼

川大 大聖寺支部句会 (石川県)

野村味平選

銭湯の話学者と言うはあだ名らし 醉羊
横槍と横槍同士論じ合ひ 久雄
止めたよき酒友と別れて灯が恋し 俊夫
反対党兎角横槍入れたがり 桃園
横槍を入れて煙草をぶつと吹き 昌男
口下手が万雷の拍子で迎えられ 味平
横槍が入り花見の時期がずれ 武富
口下手な妻にお客はよく喋り 真人
激論はビールの泡を髭につけ 光郎
今かけたパーマがバスマ共揺られ 恒雄

川ハ ワイ支部句会 (ハワイ)

三月句会

築山快夢起報

お仕事の邪魔ぢやなくて邪魔になり 虹橋
笑うのも仕事となればつらいもの 伯楽
鞭打つて停年迄と足を引く 細民
仕事しに生れ失業続くなり 旋風
仕事帰りに自動車の波に流される 東田楼
パウハナに浮ぶ子の顔妻の顔 快夢起
理想には遠い仕事もパンがさせ 草一郎
仕事には忠実ですと先ず買われ エス子
晴れ渡るその日楽しいニュージョツプ 暁舟
快よい風に一日の仕事終え 鈴子
儲からぬ仕事張合なく忙し 馬喜々
三十五仙弁当と菓子でふいに成り 風草
揃った仕事へポッス愛嬌まき 芳雨
憧れの野良の仕事を淋しがり 拝山
篤農と云われ仕事の虫となり 迷朗
金儲け機智と度胸のいる仕事 柳葉
俳優も仕事にあきて歌手となり 浪之助

仕事仕事月火水木金 魔花麗
待遇と仕事の秤釣り合わぬ 周防
ローギヤで行こうと仕事案にする 笑有
ときはきと嫁にもほしい仕事ぶり いつ生

川岡 岡山支部句会 (岡山市)

四月十五日

於 苦田温泉
土井雷山報

金のある男がほしい花だより 久米雄
花だよりサナトリニウムも少し浮き 十九平
美人ふと食いつくような目に出合ひ 東岸子
先妻の皮肉な視線とすれ違い 喜楽
真実に触れてやり場のない視線 承平
花だより二仲は金の無心なり 多賀雄
羨望の視線を背なに賞をうけ 酔歩
花だより坐骨神経痛癒えず 柳風子
豊吉を夢みて三味線稽古させ 三六

旭川市

上役の視線が固い顔にする 瀧慕
花だより看護の妻の謔むを聞き 白水
三味線が出て上役らしくない踊 吟平
大津絵が出ると女将が三味をもち 麦太楼
三味線を入れると酒が追加され 雷山
許す気の視線へ熱い眸を閉じる 苦楽

川松 松江支部句会 (松江市)

四月十四日

於 檜木山配水場

山火事と知りサイレンを気にこめや 外樹
山火事の向うの谷に桜咲き 冬生
勘違いとは言わず迷宮入りと言ひ 真太郎
父さんの水筒は別な花見する 山川児
彌次馬が遠まきにするドス光る 伊日記
彌次馬が消防ボシの先きを行き ふる児
空席を雑誌が変りに番をする 稔
療養誌読まず退所の日も近し 弘子

文豪の生家は低い藪のかけ 巷雨
低い生活の中の子沢山 祥月
父ちゃんが一番低い参観日 章峯
夜警一人に勿体ない月が出る 与根一
海兵卒という肩書きがある夜警 孤呂二
夜廻りへみんな良い夢見て居そう 天痴人
ふころ手したま、夜警の火を借りる けん坊

川高 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓選

遂げさせてやりたい友の片想い 直喜
通じない恋へ或る日の酒の量 温天
片想せめて一緒にのバスに乗り 康之介
孔孟も学んで恋は片想い み舟
片想してた女に又出合ひ 正哲
この想とどけと書いてうらみ とし子
片想君行く道の窓を開け 英太郎
お転婆も野菊にささやく片想い 己
食べるだけ食べてサヨウ片想い 素有
そっしておいてほしいよ片想い 由紀子
片想の思慕へ白梅ささやかれ 寛
夕食へまだ降りてこぬ片想い 一周坊
片恋と悟るコヒー冷めてゆき 康平
片想とは知らなんだ知らなんだ 紅梅
片想でなかつた口笛高く吹き 江
世帯持つ希望へ二人よく稼ぎ 俊一郎
面会の妻に世帯のやつれ見え 海鳥
新世帯道具不足を愛で足し 勝龜
女世帯新割る音が聞こえて来 耕生
小姑の口が世帯を別にする きみ
お互の秘密は秘密新世帯 竹比呂
夢盛った設計もたて新世帯 蘇水
出産の日から父ちゃん用が増え のぼる
無事出産祈るお願のよだれかけ 蚊市

出産へ産婆を呼びに出る月夜 舟帆
初産へ夫も見てる育児篇 そよ子
似なくともよいとこまでも俺に似て 久平
頼りない儘に今日から父となり 徳三文
どらでもいゝ上俺とお前の結晶だ 梅林
安産と解つてからの欲を出し 玲羊
考えた挙句生ました子の元氣 左千子
出産を姑も案じて居てくれる 迷窓

川 京都支部句会 (京都市)

四月十六日 於 仲源寺 田中鳥雀選

金抱いて浮世をはづれそらにす 紫蘭
義理堅い男浮世に小さくすみ 尙平
わがまゝにそだち浮世の波きびし 九角
半と賭け半なら浮世面白し 鳥雀
絶景へ切るハンドルを信じ度し みてい
鮮やかな嘘見逃してやるのなり 司郎
子の出来る石頂いてまだ出来ず 入仙
金づるの鉞石をけらで見せて呉れ 絃二呂
石立っている座つてる走つてる庭 ゆきら
墓となりたる石の退屈 豊次
提灯の丸いあかさの中に藪 青二
肩に手をその手に愛を置く夜道 磔
おらた児の寝入る重さを夜の道 親生
下鴨へ越して夜道に馴れている 鞍馬
出たために言つた通りに雨が降り 龜一

川 貴生川支部句会 (滋賀県)

三月二十日 於 馬場夢生居 黄瀬美秋選

フアツションショーはやりて大も引出され 綾子
姿見へ帯を鳴らして嬉しそら 可十
帯しめてお女将小さい義理を立て 迷羊

名古屋帯結めず羽織着て出かけ 俊子
横着な居候へ鬼は外 碧水
結婚をする氣残業して稼ぎ 紅月
特級酒末座は軽い量で来る 夢生
特級酒お金に酔うた程うかれ 美秋

川 木次支部句会 (島根県)

四月十六日 於 役場 藤井明朗報

町内へ声かけて行く入学日 綾美
背な向きで入学式の訓話聞く 蜂人
夜桜に浮かれ二次会派手になり 詩朗
夜桜は花より酒を可愛がり 雄声
駅前で落ち合う時間打合せ 明暗
駅前でコップ一杯が乗り遅れ 勝美
終列車駅前ガランとした広さ 紫朗
大臣を待つ駅前には赤い旗 明朗

大阪通信病院句会

三月十七日 (土) 於 講堂 橋本幸男報

呑仲間何時もおんなじ唄ばかり 凡平
悪友と妻割り切つた飲み仲間 春巢
合図だけで意味の通じる呑仲間 みのる
男泣きあと照れている 方正
スト 妥結涙男の頬濡らす 春巢
男泣きしたとこニユースにうたさる 竹莊
来客のカメラに皆並ぶなり 愛論
来客へ秘書はこまめによく動き 幸男
一杯の茶が冷めてまだ待たされる 方正
他人の口野球入学などと云う 春巢
入学に裏門もありボスも居り 桃村
入学をすれば汚い校舎なり 春雄
入学の明日へ眠れぬランドセル 夏生

333 川柳会 (堺市)

四月九日 於 島野工業検査室 川村好郎選

入学の裏口日本氣で聞きに来る 峰春
入学へ工面さんたんやつと出来 よしを
入学へ大手を振つて見たい朝 幸男
金が光つた入学だとは思つてず 路郎
ボクですかなどと入学こまじやくれ 路郎
香篋を持って訪ねた四月馬鹿 雄声
仲人の云う程真面目でない養子 晴美
笑われてから気がつく四月馬鹿 雪山
宴酣にして若手がもてはじめ 高志
時季外れの雪に測候所はあわて 元歩
若手というだけの芸妓もいる 霧
貸付へ選り抜きの花を持たせとき 好郎
影になり若手に花を持たせとき 狂二
真面目さが甲斐性なしにされている 素男
病人の氣儘時季外れを食べたがり 圭水
総踊り若手は茶碗たたかされ 貴山
庭隅に家風をしのぶ赤鳥居 広平
選抜で社長の前で舞う哀れ 一葉
選ばれて赤字会社の後始末 広平
一徹な頑固へ若手座をはずし 南宗
儲けてた時分のまゝの庭の石 俊平
時季はずれ鹿も一声鳴いてみる 好郎

みをつくし川柳会 (大阪市)

四月十七日 於 天王寺小学校 戸田古方選

ロマンチック 浮氣に縁なく無事に生き 斗牛
アルバイト迄漁人がすわり込み とし坊
浮氣してはしせんでもほしい倦怠期 清恵
人形も年を取つたか面やつれ 喜峰
又浪人さと大の字でジャズを聞く 公子

言訳だ煙草ふかした廻り椅子 光二
高飛車にばれた浮氣へおとし見 花香
そんな気はさら／＼なかつた管の恋 凡九郎
真実はこうと人形言いたそう 圭水
人形へ母に云われた通り云い 宏
面当のつもりが恋になつていた 歌
言訳へいたずら遂に笑い出し せつ子
空弁当まくらにひばりみあげて居 夢広
浮氣する腹お美事な飲みつ振り 梨花
でわついでにと御用言いつかり 正斗
ひこりこかと思えば襖越しの言訳 のぼる
こうまでも云うた通りになろうとは わい／＼とうとう連添うた 古方

阪東ベルト川柳会 (神戸市)

飯尾寄与史報

炭焼の弁当猿が見つけ出し 寄与史
お猿もうその手にやらの顔になり 比加留
弁当もピクも空っぽでもどつてき 村雨
違筆な辞令でちよつぱり上げてくれ 三平
昇給に負けても将棋負けられず 多呂坊
食堂の窓入階の風を入れ 柳坊
食堂の名画の額が湯気にほけ 歩つ歩

季節一品料理

江戸前にぎりずし
アペノ橋地下映画食通街

梅里の店 大萬

★大万川柳(第六十四回)を募る

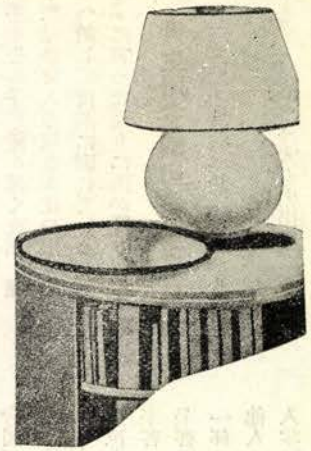
兼題「割箸」路郎先生選

締切・六月十五日 旬報五号以内

発表・六月二十一日(店内掲示)

投句は 阿倍野区松崎町三丁目

一〇 大万川柳会宛



声

以前から、一度句会に出てみたいと思っていたが、どうにもその勇気が出ない。今月こそはと兼題を作句しながら、いつもドタン場になると、おそれをなして光明寺へ足が向かなくなるのである。

五月句会には、ある先輩に無理矢理に誘われて全句オダブツの覚悟で光明寺の句会場へのぞんだものである。先輩からは、出席者の三分の一は全没であることを聞かされてはいたが、せめて一句だけはと、仏さまへ手を合わせて気持ちもなる。

れる人もいない三時間の沈黙は、息苦しさを覚えたに違いない。新人がきた時は、常連の方から心安く話しかけてもらえたら、新人も出席し易くなるのではないだろうか、とも考えてみた。

待ちかねた披露になって次ぎ次ぎと発表されていったが、遂に仏さまに見はなされてしまった。タッタ一声、あげたかったが、実力の差であらうか、引導鐘が鳴ってしまったのである。

近作柳樽へちよいちよい投句するのですが、二度に一度位いより抜けませんが、新参者は毎月出して貰えないのでしようか、新参者でも、佳句が出来たら毎月でも雑誌に載せてもらえませんか、(新潟・恒子)

近作柳樽への投句に新参古参はありますか。毎月全没が数十人ありますが気を落さずご精進を祈ります(係り)

雑誌をひろげて、句は読めても雅号の説めない人が実に多い。何と読むのか、全然わからないのがある。誰れその句は巧いねと言ふ時に句者の名が言えないのである。何かの機会にこの難しい雅号にブリガナをつけてほしいと思ふのは私だけであらうか。(京都・豊島茂夫)

▼本号から「雅号ハガキ」というのを組んでみました、如何でしょうか。(編)

川 雑

★すつかり夏らしくなりました。川柳家の皆様の夏姿を涼しく美しくしたいと本社の路郎主幹が自句を揮毫され、別染にされて大変好評を博したものです。男女共通に召されることが出来湯上りに好適です。旅に出かけられる時などは、車中にも、宿でもお召しになればまことに趣味らしい寛ろぎを感じさせられます。又句会の余興などに揃いの川柳浴衣で踊られるのも夏の会らしくていいと思ひます。至急御注文下さい。

頒価八五〇円・送費六〇円・御送金は社の振替(大阪七五〇五〇番)を御利用下さい。★路郎先生に原稿、揮毫、選句または出張の依頼はサービス部まで御さい。★句評、添削等の御希望に対しては下記の諸

貴方の 8mm

アロ映寫機

動く写真の記念アルバム

貴方の学校・会社・家庭にも一用に御用ください

東京 朝日電機製作所 大阪 株式会社



公・私・雑・記

★女が特に美しく見える季節になった。エンドロの匂いが、初夏の味覚をそそるシーズンになった。それらしい匂いがドシ／＼生れることと思ふ★前号は大変好評だったので編輯局も気をよくしている★潮花は句八丁、足八丁でみんなをうらやましがりせている。出て来ては喋りまくって踊りまくっては、夜十一時近くまで居る。あアしもた。今日は家内が留守なので子どもに、晩のオカズを買って来てやる約束だったのにお父さんである。★一三夫は老人でもないのに、大きな天眼鏡で真剣に校正刷をのぞいている。一字でも違つたら作者に申訳がないという彼一流の入念ぶりである★POEは毎日印刷所へお百度を踏んでいる★本号から「川柳家の二十四時」を発表することにした。好説物たるを疑われない。次は誰と誰が掲載されるか、それも興味のひとつとなる。★綿載されている東野大八氏の「人間横丁」も本誌ならではの好説物であろう。★山雨楼が亡くなつて一年、しみ／＼と故人のことが思われる。あれぐらい熱心に川柳のために働いてくれた人は多い。バター／＼と騒ぎまわる人はいても、ジツクリと、川柳のため

めに考えて、それをたんねんに実行に移す人は稀れである。山雨楼はその稀れな人の一人であった。六月十六日が一周忌になるが、都合で六月七日に光明寺で山雨楼忌句会を開くことにした。故人を知る人は云うまでもないが知らない人も参会して、その死の寸前まで川柳のために力をつくしてくれた故人を偲んでいただきたい

柳人交歓暑見中舞見廣告を募る

八月号へ貴方の暑見舞見廣告を
★一ト口金二百円。
幾口でも申込んで下さい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います一ト口分は五分の一段組三行。
★原稿締切は六月末日齋便
★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)

趣味のモデルにするのもいいが撮したら、送って呉れるエチケットぐらいいは心得ていいだろう。送つてくれたのはI君とO君の二人だつた。★五月十三日に川柳鳥取支部の主催で山陰川柳大会が開かれ大阪からも多数参会した。なかなか盛会だつた。私は壇上で可愛い女の子の手から花束を贈られた。思ひの子ないことなのでうれしかつた。腹乃もいただいた。丁度母の日に當つていたので、川柳の母として贈られたのである。日満氏の案らしいが、一瞬会場が明るい感じがした。いい思ひつきである。風食後の余興に、鳥取名物の傘踊りを見せてもらったが、自分も一緒に踊りたくなるほどゆかいな踊である。ユカイなと云う意味はまことにユニーソでカッパツだつたことを意味する。★不朽洞会員の句集も、選句がながびいて恐縮している。しびれを切らしている人たちもあらうが、もう少し待っていただきたい。こればかりはオートメーションと云う訳にいかぬので困っている。乗遅れた方や、その後の入会で、参加希望の方は刊行委員まで申込んでいただきたい。★七月は恒例の川柳まつりだ。今年は何処へ行くやら。(路)

内木材運搬用のトラックと側面衝突し、アツと思ふ間に私の右足はトラックの前輪を通過させて居りました。担架で外科へ運ばれレントゲン透視の結果、第二指より第五指まで四本の指骨に亀裂を生じ今晩は痛むぞとおどかされ腫に板切れをくつつけられたまま入院させられました。夜八時頃より夜半に至るまで可成の疼痛に悩まされましたが其の後経過はよく十五日ギプス、十六日退院して今日一ぱいと御宣託を受け只今自宅療養致して居ります。

★五月三日に天王寺本坊の庭で「一番傘」の川柳まつりがあった。私も招かれて行った。催物があつてなかなか賑やかだつたが、私は南北翁夫妻や山口草平画伯などと庭の隅で、寿海という酒に親しんだ。ここで平素あまり会えない人たちに会えたことはうれしかつたが、ムヤミにカメラに取りまかれたことはいささかうるさかつた。

飛・燕・往・来
眞鍋一瓢氏(大阪市)より

船木夢考氏(敦賀市)より
ごむきたします。川雑、大八氏の「人間横丁」毎月よんでいます。五月号は陣居君の「余韻ある大阪ことばを生かせ」が面白いです。去十二日神戸ふあうすと会へ出席十三日大阪わかき会へもちよいと顔を出しました。来る三日の南北老の喜寿の会に出席の予定でいます。久し振りに貴台とも拝眉出来ると楽しみにしています。川雑北陸大聖寺の例月句会へも出席したいと思つています。今度住所が変わつたら幸いです。一度金沢へお越になりませんか、金沢で六、七年前お会いした時より此頃川柳も盛んになっています。一度お出下さい、私も行きます。

去る八日午後四時工場内、私の工場から新造船現場工事を一応見て来ようとして工場を一步出た時、場

川柳雑誌社元社友の大谷玉花村氏(福島県白河市五箇局区内借宿)を今回洞友に推薦

Printed in Japan

川柳雑誌

(載轉禁)

B列5号 毎月一回一日発行
定価 五〇円 (送料四円)

昭和三十一年五月廿五日印刷
昭和三十一年六月一日発行

半ヶ年 三二四円
一ヶ年 六〇〇円

発行所 川柳雑誌社
電話 住吉 六〇八一
郵便 住吉 七五〇五〇

課題吟募集

奥さん (廿句以内) 西尾 葉選
鳥 (廿句以内) 石川侃流洞選
(六月二十日締切)

每家募集

転居 (廿句以内) 中島生々庵選
画家 (廿句以内) 三嶋 美笑選
(七月二十日締切)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▲「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

(毎月二十日締切)

THE SENRYU ZASSHI

NO. 349

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

忘れよう!

高血圧を



サーピナ錠

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠!成分含量も多くてお得です

山之内

眼のないはなし



HORAI

パパもママも ホーライ党

広南料理

蓬菜

大阪 なんば

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ...

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大阪—名古屋 2時間48分
大阪—宇治山田 2時間
名古屋—宇治山田 1時間40分

大阪上六発	名古屋発	宇治山田発
7.40	16.40	8.00 16.00
8.40	17.40	9.00 18.00
11.40	19.40	12.00 20.00
13.40	14.00	14.37



本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

スヌードで
着心地のよい

O.S.K.

レディメイド

餐室 **大坂商店**

大阪市東区船場一丁目二番七
電話 東(94)1745・5563番